

平成12年度 市道四絡30号外1線道路改良工事に伴う

# 小山遺跡第3地点発掘調査報告書

(第3次発掘調査)

2002年3月

出雲市教育委員会

平成12年度 市道四絡30号外 1線道路改良工事に伴う

# 小山遺跡第3地点発掘調査報告書

## (第3次発掘調査)

2002年3月

出雲市教育委員会

## 序

小山遺跡が所在する出雲市四経地区は、矢野遺跡・大塚遺跡・姫原西遺跡など、出雲市でも有数の集落遺跡の密集地帯として知られています。近年の開発に伴って、発掘調査も増え、しだいに古代四経地区の様相が明らかになります。

このたび、市道四経30号外1線道路改良工事に伴い、小山遺跡第3地点を発掘調査いたしました。その結果、弥生時代から古墳時代初頭にかけてと奈良・平安時代及び中世の遺構・遺物を検出しました。特に、古墳時代初頭に埋まつた溝状遺構は、天神遺跡や古志本郷遺跡・下古志遺跡などでも確認された「環濠」と類似しており、貴重な発見と言えます。また、墨書き須恵器が検出され、平成6年度（第1次）調査において確認された墨書き土師器・ヘラ書き須恵器などと合わせ、古代の人々の暮らしぶりを伺い知るうえでの重要な資料となりました。

これらの成果が、今後の研究資料として広く活用され、歴史の解明と郷土の発展に寄与することを期待するとともに、発掘調査及び本書を発刊するにあたり、ご指導ご協力賜りました関係者のみなさまに心から御礼申し上げます。

平成14年（2002）3月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

## 例　　言

1. 本書は、出雲市（道路河川課）より依頼を受け、出雲市教育委員会が、平成12年度に実施した、市道四絡30号外1線道路改良工事に伴う、小山遺跡第3地点第3次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査地は次のとおりである。

小山遺跡第3地点（出雲市遺跡地図遺跡番号G04、地図番号10.11）  
出雲市小山町地内（旧四絡ふれあい広場）
3. 発掘調査は、平成12（2000）年5月8日に着手し、平成13（2001）年2月2日に終了した。
4. 調査組織は次のとおりである。

調査主体	出雲市教育委員会
事務局	大田　茂（出雲市教育委員会 文化振興課課長）
調査指導	田中義昭（島根県文化財保護審議委員）
調査担当者	池淵俊一（島根県教育庁 文化財課　主事）
調査補助員	園山　薰（出雲市教育委員会 文化振興課　嘱託員）
調査補助員	糸賀伸文、勝部真紀、（文化振興課臨時職員）
5. 発掘調査、遺物整理、報告書作成においては、以下の方々の協力を得た  

発掘調査	吾郷　栄、吾郷要子、板垣将信、大森長一郎、公田悦郎、畠　守隆、福田益之、星野勝義、松田高志、米原信夫、和田昭七、
遺物整理	飯國陽子、吹野初子、河井栄子、岩崎晶美
6. 出土遺物の実測は、上記調査員・調査補助員のほか、瀧尻幸平が行った。
7. 本書に掲載した遺物写真の撮影は、園山が行った。
8. 発掘調査、ならびに報告書作成に当たっては、以下の方々から有益な御指導・助言を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略）  
松井　章（奈良国立文化財研究所）、平石　充（島根県立博物館）、錦田剛志（同）、西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、内田律雄（同）、松山智弘（同）、松尾充晶（同）、渡部正巳（文化財調査コンサルタント（株））
9. 石器の石材鑑定は羽木伸幸氏（社会福祉法人千鳥福祉会　嘱託員）にお願いした。
10. 掘図中の北は、磁北を指す。従って測量法による第Ⅲ座標系のX軸より、7°55' 西の方向を指す。レベル高は海拔高を示す。
11. 本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。

S B：掘立柱建物、S A：柱列、S E：井戸、S K：土坑、S D：溝、
12. 土器実測図のうち、アミかけしたものは赤色塗彩を示す。
13. 本書の執筆・編集は園山が行った。
14. 出土遺物及び実測図、写真等の記録は出雲市教育委員会において保管している。

# 本文目次

序

例 言

本文目次

挿図目次

図版目次

第1章 位置と環境 .....	1
第2章 調査の経緯 .....	3
第3章 調査の結果 .....	6
第1節 調査の概要 .....	6
第2節 造構と遺物 .....	7
第4章 まとめ .....	34
出土遺物観察表 .....	36
図 版 .....	図版 1 ~ 29

## 挿図目次

第1図 小山遺跡第3地点周辺の遺跡分布図	2	第21図 SK19実測図	20
第2図 小山遺跡第3地点調査配置図	3	第22図 SD03.04実測図	21
第3図 遺構配置図	4, 5	第23図 SD08.09実測図	22
第4図 土層図	7	第24図 SD10実測図	23
第5図 SA01実測図	8	第25図 SD12.13実測図	24
第6図 SB01実測図	8	第26図 SD15実測図	25
第7図 SB02実測図	9	第27図 溝状遺構土層図	26
第8図 SB02出土遺物実測図	10	第28図 SD04.09.12.13.15.18出土遺物実測図	27
第9図 SB03実測図	10	第29図 SD23実測図	28
第10図 SE01実測図	11	第30図 SD23出土遺物実測図1	29
第11図 SE01出土遺物実測図	11	第31図 SD23出土遺物実測図2	31
第12図 SK01実測図	12	第32図 遺構外出土遺物実測図1	32
第13図 SK01出土遺物実測図	13	第33図 遺構外出土遺物実測図2	33
第14図 SK01出土木製品実測図	14	第34図 墨書き器実測図	33
第15図 SK02実測図	15		
第16図 SK10実測図	16		
第17図 SK10出土遺物実測図	16		
第18図 SK17実測図	17		
第19図 SK18実測図	18		
第20図 SK18出土遺物実測図	19		

## 図 版

- |  |  |
|--|--|
| 図版1 調査区全景（上から）   | 図版16 SD 2 3 検出状況（南から）  |
| 図版2 SE01.SD03.23.SK18（上から）                                     | SD 2 3 調査状況  |
| 図版3 調査区南半分（上から）  | SD 2 3 遺物出土状況  |
| 図版4 調査区北半分（上から）  | SD 2 3 遺物出土状況  |
| 図版5 SB 0 1（北から）<br>SB 0 2（東から）<br>SB 0 2, SD 1 2, 1 3 プラン（東から） | 図版18 SD 2 3 土層<br>SD 2 3（南から）<br>図版19 調査区（南から北を望む）<br>調査区南側（市街を望む） |
| 図版6 SE 0 1 遺物出土状況<br>SE 0 1（南から）<br>SE01.SD03.20.21.22         | 図版20 SB 0 2 出土遺物<br>SE 0 1 出土遺物                                    |
| 図版7 SK 0 1<br>SK 0 1 遺物出土状況<br>SK 0 1・0 2（南から）                 | 図版21 SK 0 1 出土遺物<br>図版22 SK 1 0 出土遺物<br>SK 1 9 出土遺物                |
| 図版8 SK 1 0 遺物出土状況<br>SK 1 8 遺物出土状況<br>SK 1 8（北から）              | SD 0 9 出土遺物<br>SD 1 5 出土遺物<br>図版23 SK 1 8 出土遺物                     |
| 図版9 SD 0 1<br>SD 0 1, 0 2<br>SD 0 3（北から）                       | 図版24 SD 2 3 出土遺物<br>図版25 SD 2 3 出土遺物<br>図版26 SD 2 3 出土遺物           |
| 図版10 SD 0 4（南から）<br>黒色土落ち込み（北から）                               | 図版27 溝内出土遺物<br>遺構外出土遺物（墨書き須恵器）                                     |
| 図版11 SD 0 4 土層<br>SD 0 5, 0 6（南から）                             | 図版28 遺構外出土遺物<br>図版29 遺構外出土遺物（製塙土器）<br>遺構外出土遺物（陶磁器）                 |
| 図版12 4 Gr より北調査状況<br>SD 0 8, 0 9（南から）                          |  |
| 図版13 SD 1 8, 1 9（西から）<br>SD 0 8, 0 9, 1 1（西から）                 |  |
| 図版14 SD 1 2（北から）<br>SD 1 2 土層<br>SD 1 3 土層                     |  |
| 図版15 SD 1 5 検出状況<br>SD 1 5 土層<br>SD 1 5（東から）                   |  |

# 第1章 位置と環境

小山遺跡は、出雲市中心部の北側に隣接する四経地区に所在する。同地区は、近年ますます都市化が進み、発掘調査も急増してきている。小山遺跡は、弥生時代の拠点集落として知られる矢野遺跡や、大塚遺跡、姫原西遺跡、蔵小路西遺跡などとともに、「四経遺跡群」を形成する遺跡のひとつである。

「四経遺跡群」の中核となる矢野遺跡は、縄文時代後・晩期から始まる集落遺跡で、矢野第3地点では弥生時代後期に吉備地方から搬入された特殊土器などが発見されている。小山遺跡は矢野遺跡に付随して弥生時代中期中葉から遺存してきた。

本調査地は、出雲考古学研究会の調査により地点分けされた小山遺跡第3地点にあたる<sup>⑨</sup>。旧神戸川の下流域に形成された自然堤防上に立地しており、小山遺跡の北東部分にあたる。IH河道の右岸に形成された微高地上に発展した遺跡である。東は大塚遺跡に接し、IH河道の左岸に小山遺跡第1、第2地点を見る。本遺跡ではこれまでの調査で、弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落遺跡であることが分かっている。

縄文時代、「神門の水海」と呼ばれた潟湖の縁辺部に集落が出現し始め、後・晩期になって、矢野遺跡や蔵小路西遺跡・善行寺遺跡など、平野の中心部でも本格的に発展していく。縄文時代後・晩期の遺跡からは、弥生時代前期の遺物が出土しており、連続して遺跡が存続していたことが窺える。

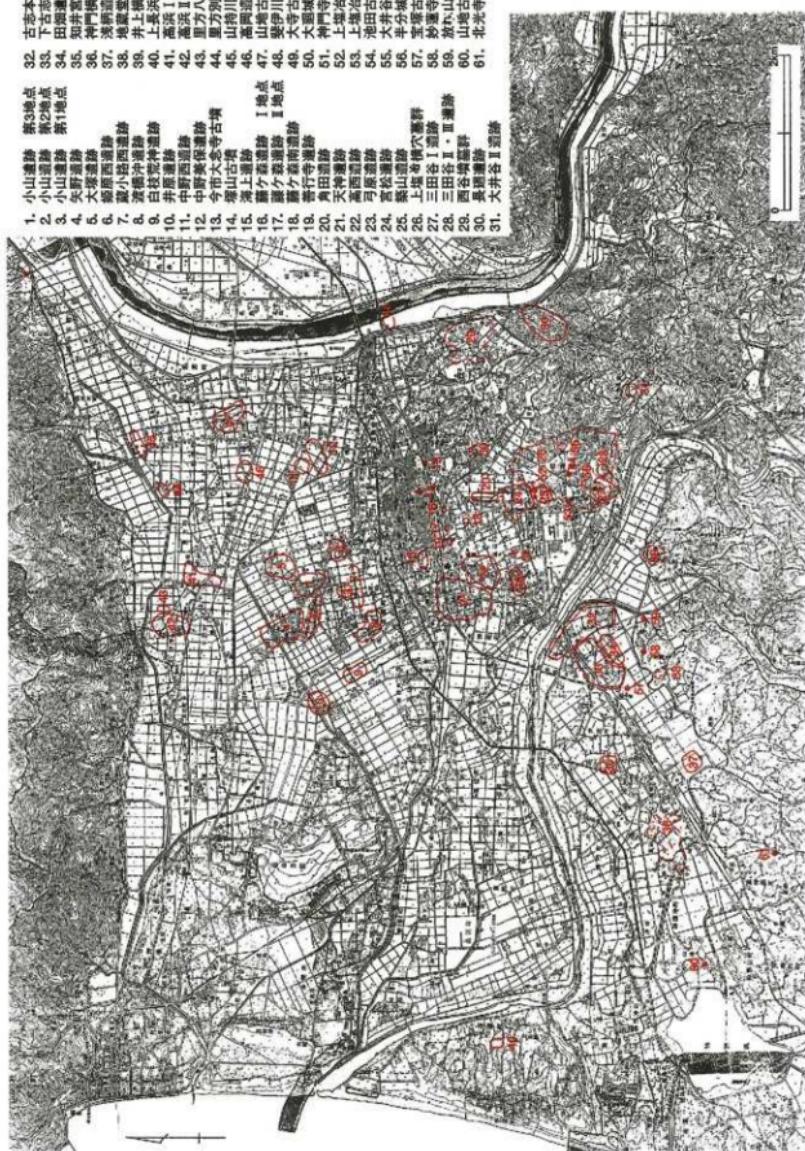
弥生時代中期以降、矢野遺跡をはじめ平野部の集落は急増し、天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡などの拠点集落の出現を見る。小山遺跡第3地点では、平成9年度の調査（第2次）で、弥生時代中期後葉から後期前葉の「環濠」と思われる溝状構造が確認されている<sup>⑩</sup>。後期後半に至って、出雲平野を見下ろす西谷丘陵に四隅突出型埴丘墓が築かれるなどの発展を見るが、終末期から古墳時代初頭にかけて、ほとんどの遺跡は終息してしまう。その原因は未だ解明されていない。古墳時代前期の平野中心部は空白期であり、縁辺部でわずかに遺跡が確認されるのみである。古墳も北山山麓に大寺古墳、神西湖東岸に山地古墳などが築かれる程度に過ぎない。これは、畿内中央政府との関係が影響しているものと考えられる。

古墳時代中・後期になると、平野部の集落も徐々に再興していく、出雲地方最大の前方後円墳である今市大念寺古墳や上塙治築山古墳などの大型古墳が築かれるようになり、終末期には上塙治横穴墓に代表される横穴墓が多数分布するようになる<sup>⑪</sup>。

律令時代、平野の各地で遺跡が確認されている。古志本郷遺跡では近年の調査で、「神門の郡家」跡に比定される建物跡が発見されている。平野の西には、当時西流していた斐伊川と神戸川による「神門水海」が広がっており、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によると、本遺跡付近は「神門郡八野郷」に比定されている。平成6年度の調査（第1次）で、墨書き土器やヘラ焼き土器が確認され、同書記載の「八野郷」との関連も指摘されている。

中世に至って、蔵小路西遺跡からは12~15世紀の朝山氏の居館跡と考えられる遺構が確認され<sup>⑫</sup>、また、矢野遺跡では14~15世紀の屋敷跡が確認されており、四経地区は中世以降も繁栄してたようである。

- 第3地点
1. 小山遺跡
  2. 古山遺跡
  3. 小山遺跡
  4. 天野遺跡
  5. 須原西遺跡
  6. 須原西遺跡
  7. 露原西遺跡
  8. 露原沖遺跡
  9. 白枝堂神遺跡
  10. 井原遺跡
  11. 中野西遺跡
  12. 中野美保遺跡
  13. 今市大志寺古墳
  14. 鞍山古墳
  15. 滝上遺跡
  16. 藤ヶ森遺跡
  17. 藤ヶ森遺跡
  18. 藤ヶ森南遺跡
  19. 萬行寺遺跡
  20. 肩田遺跡
  21. 天神遺跡
  22. 高山西遺跡
  23. 弓原遺跡
  24. 宮松遺跡
  25. 紫山遺跡
  26. 上塙寺情穴古墳群
  27. 三田谷 I 号路
  28. 三田谷 II・III 号路
  29. 西谷寺古墳
  30. 長原遺跡
  31. 大井谷 I 号路
  32. 古生木原遺跡
  33. 下古木原遺跡
  34. 田畠遺跡
  35. 知井富多閑院遺跡
  36. 神門湖穴古墳
  37. 洪明前遺跡
  38. 地藏堂掘穴古墳群
  39. 井上掘穴古墳群
  40. 上島浜貝冢
  41. 高浜 I 号路
  42. 高浜 II 号路
  43. 里方八石原遺跡
  44. 里方別所遺跡
  45. 山神川川岸遺跡
  46. 高岡遺跡
  47. 山地古墳
  48. 姶宇川鉄橋遺跡
  49. 大寺古墳
  50. 大國城(向山城)
  51. 神門寺境内古墳
  52. 上塙寺情穴古墳
  53. 上塙寺情穴古墳
  54. 田代古墳
  55. 大井谷古墳
  56. 大分城
  57. 宮原古墳
  58. 姶運寺山古墳
  59. 姶丸山古墳
  60. 山地古墳
  61. 北光寺古墳

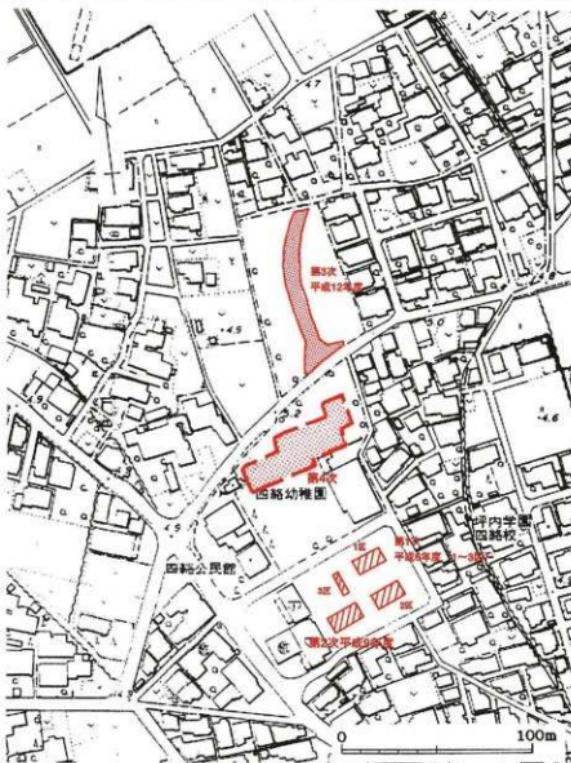


第1図 小山遺跡第3地点周辺の遺跡分布図

## 第2章 調査の経緯

平成11年（1999）8月31日付で、出雲市長（道路河川課）より、市道四絆30号外1線道路改良工事予定地内の埋蔵文化財試掘調査の依頼があった。工事予定地は周知の遺跡である小山遺跡第3地点の範囲内であったため、平成11年（1999）9月21日 出雲市教育委員会が現地の試掘調査を実施した。その結果、NHKの旧放送所鉄塔基礎により、部分的に遺跡が破壊されている箇所があるものの、工事予定地全域において、埋蔵文化財包蔵地であることが確認された。

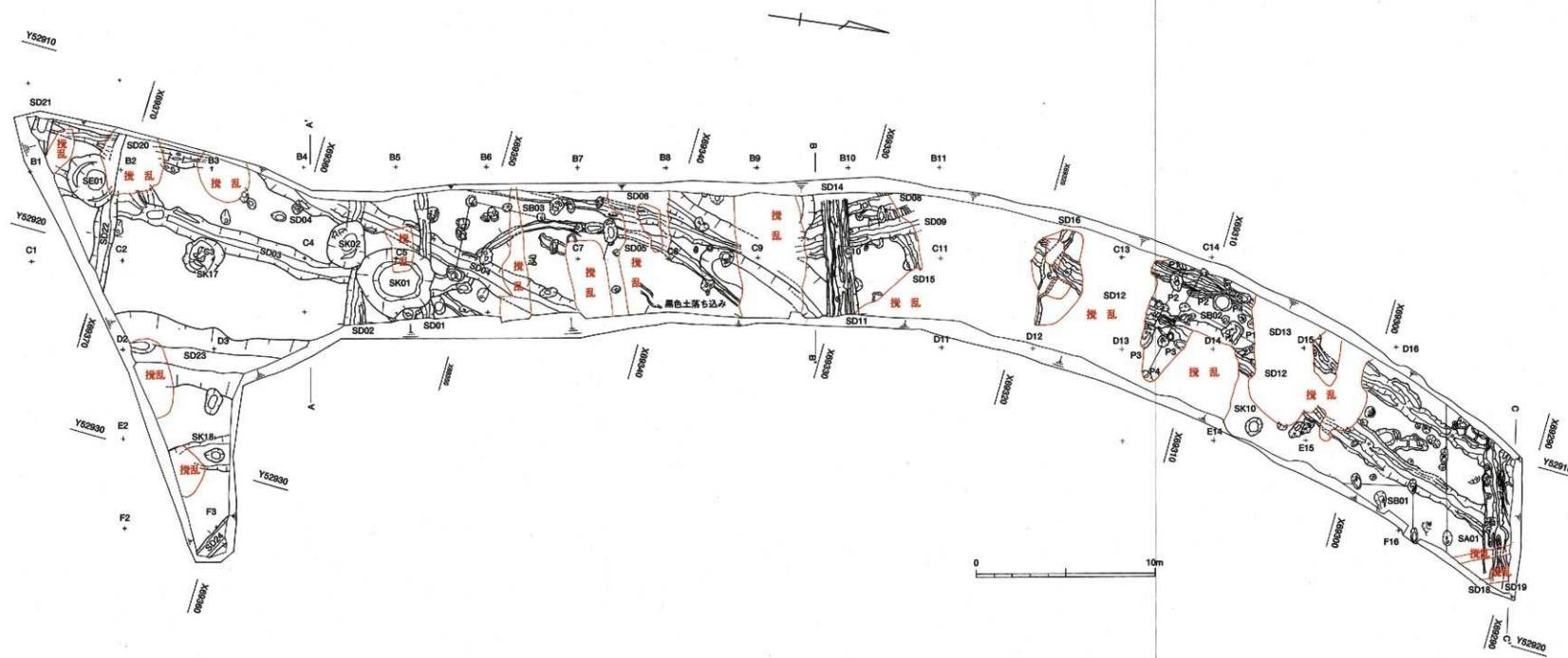
平成12年（2000）3月21日付で、出雲市長（道路河川課）より、市道四絆30号外1線道路改良工事予定地内の埋蔵文化財発掘調査の依頼があった。調査範囲は $720\text{m}^2$  ( $8 \times 90\text{m}$ ) であるが、本調査地は公園（四絆ふれあい広場）として使われていたため、南側に桜の古木が植わっており、調査に支障をきたすことが考えられた。しかし、この桜は他の公園に移植する計画があったため、道路河川課と協議し、南側部分（ $160\text{m}^2$ ）については桜の移植後の10月以降に調査することになった。



第2図 小山遺跡第3地点調査配置図 (S=1:2500)

平成12年（2000）5月8日より、南側部分を除いた $560\text{m}^2$ の調査を実施し、平成12年（2000）9月8日に終了した。その後、桜の移植作業も11月までに終了したため、南側部分（ $160\text{m}^2$ ）の調査を平成12年（2000）12月11日より実施し、平成13年（2001）2月2日に終了した。これにより、本工事予定地内の発掘調査は終了し、島根県教育委員会と協議の上で、工事着手の運びとなった。

なお、平成13年度も出土遺物の整理作業を継続し、平成14年（2002）3月に本書を発刊するに至っている。



第3図 遺構配置図 (S=1:200)

## 第3章 調査の結果

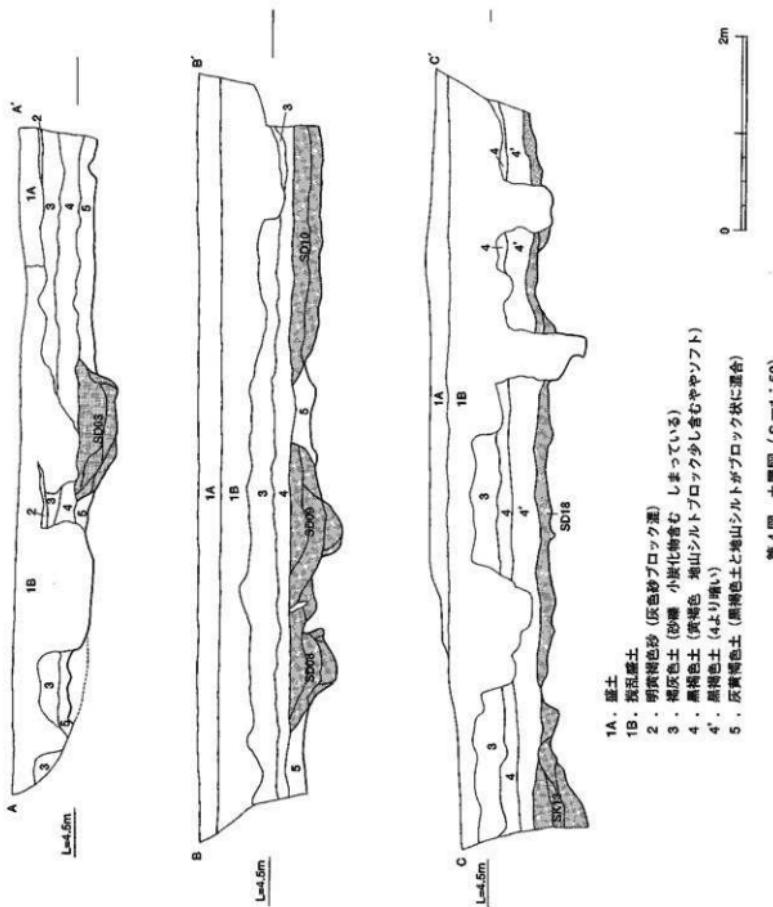
### 第1節 調査の概要（第3～4図）

本調査地は道路建設予定地のため、幅約8m、長さ約90mの調査範囲で、南北方向を北に向けて右にカーブを描く形状を成している。南の調査区外に設置したA1グリッド杭を基準に、5mメッシュでグリッド杭を設置し、北に向けてF17グリッドまで設定した。盛土及び攪乱土が厚く、深さ約1mまで重機によって掘り下げた。その後包含層を徐々に掘り下げ、遺構検出に努めた。

本調査地は戦後、NHKの旧ラジオ放送所が建っていた場所で、その後、放送所が北約200mの位置に移転した後、四絡地区の公園（四絡ふれあい広場）として整備され、市民に利用されていた。放送所鉄塔の建設や移転時の工事などにより、遺構面の約4割近くが攪乱を受けていた。そのため、検出した遺構が破壊されていたり、つながりがはっきりしない部分がある。特に、7～12グリッドにかけては放送所施設の中心部であったため、鉄塔の基礎部や攪乱により、遺構面のほとんどが破壊されていた。また、1～3グリッド内では、植えられていた桜の根のために攪乱を受けていた箇所がある。

土層の堆積状況は、調査区全域で変化ではなく、基本的に1～5層まで分層され、黄褐色シルトの地山面に至る。1層はラジオ放送所移転後、公園として整備したときの盛土で、その下には放送所鉄塔建設時及び撤去時の攪乱土が入っている。この攪乱土の中にはコンクリ塊や石礫などが混在しており、その除去に困窮した。3層は旧耕作土で、近世からラジオ放送所開設までのものと思われる。黄褐色地山シルトのブロックを含む4、5層が遺物包含層であるが、4層は、調査区全域でほぼ同レベルで平面的に堆積している。須恵器・土師器破片を出土する。耕作土の跡と考えられ、この時点でかなり平面的に削平されたと考えられる。5層が奈良・平安時代の遺物包含層である。4層と同様地山シルトのブロックを混合するが、4層より砂礫が少なくソフトである。ほとんどの遺構はこの5層に掘り込まれている。上述の様に、かなりの部分が攪乱で破壊されているが、掘立柱建物3棟、井戸1基、土坑19、溝状遺構24、他、多数のピット等を検出した。溝状遺構は大別して、東西方向に走るものと、南北方向に走るものとがあり、さらに同形状の2つの溝が平行する傾向が見られた。C2～D3グリッドにかけて検出したSD23は、古墳時代前期前葉に埋まった「環濠」の様相を呈する溝である。D14グリッドでは、攪乱を受けているものの、奈良・平安期の遺物を多く検出した。また、10グリッド以北では、13～15グリッドを中心に製塙土器破片を多く検出した。黄褐色シルトの地山レベルは標高4.3m～4.1mで、北西方向に向かって緩やかに下っている。検出した遺構の密度も北に向かって低くなってしまっており、南の微高地から北に向かって低地に至る地形と関連している。地山上の遺物包含層からは、須恵器・土師器など奈良時代から平安時代にかけての遺物が主に出土している。

平成12年10月より、本調査区から南20mにある四絡幼稚園の改築工事に伴う発掘調査（第4次）が始まり、年末にかけて調査が並行する期間があった。第4次調査区においても遺構・遺物の検出状況は類似しており、第1次・2次調査区とともに遺跡が連続するものであることが確認された。特に、第4次調査区の東部分ではSD23に続くと考えられる溝状遺構が検出されている。



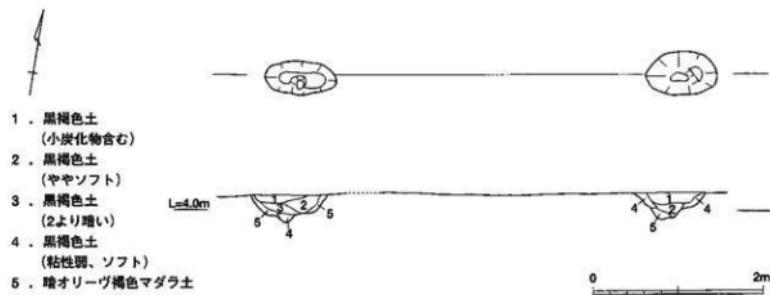
第4図 土層図 (S=1:50)

## 第2節 遺構と遺物

### 1. 柱列

#### S A 0 1 (第5図)

調査区の北端近く、16グリッドで検出した、2穴からなる東西方向の柱穴列である。柱間は約4.5mを測るが、西の調査区外へ展開する可能性もある。東西軸はN-81°-Eを指向する。約2m北には溝状遺構であるSD18、19が平行して走っていることから、これらの溝に関係するものと思われる。また、南に位置するSB01の東西軸と方向を同じくし、その距離は1.8mである。SD18、19とSB01のほぼ中間に位置することから、柵の可能性が考えられるが、2穴のみであるため断定は出来ない。覆土からは須恵器と土師器の破片がわずかに見られるのみで、SD18、19、SB0



第5図 SA01 実測図 (S=1:60)

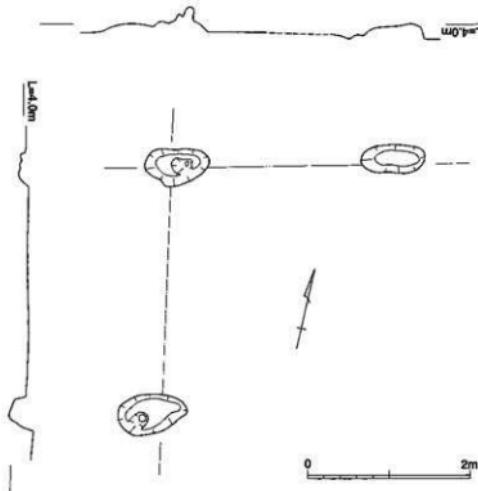
1と同時期と考えるが、決定する資料はない。

## 2. 挖立柱建物 (第6~9図)

### SB01 (第6図)

SA01の1.8m南に位置する掘立柱建物である。約3mを1間とする3穴のピットを検出した。長径0.8~0.9m、短径0.4~0.6m、深さ40~50cmを測る楕円形のピットで、SA01のピットに類似する。1間×1間分を検出したが、それ以上に調査区外に展開する可能性がある。東西を軸とした場合、N-81°-Eを指し、方向としてもSA01と同一である。SA01と同軸のピット配置を呈することから、SA01と同時期の建物と考えられる。

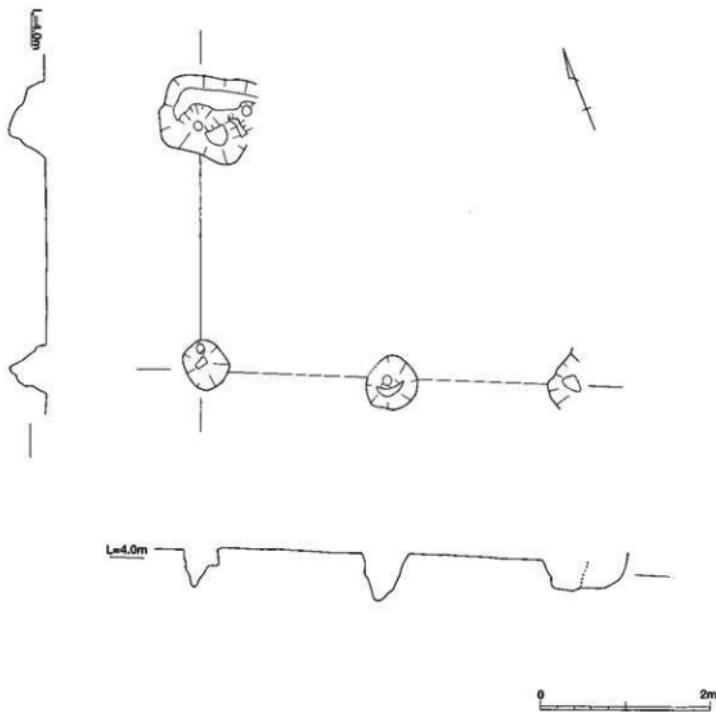
遺物は須恵器と土師器の破片、赤色塗彩の土師器破片が少量出土していることから、奈良・平安時代の建物と考えられる。



第6図 SB01実測図 (S=1:60)

### SB02 (第7図)

13グリッドで検出した掘立柱建物である。東西方向に2間(4.4m)、南北方向に1間(3m)を測る。搅乱に切られるため、正確な規模は掌握できないが、2間×1間以上の建物と思われる。南北を軸とすると、N-20°-Eを指向し、SB01・SA01より27°東に振っている。外側約90cmに東西方向1.6m、南北3.0m間隔でピットが巡る。さらに西90cmにピットが並んでおり、これらは庇部分のピットの可能性も考えられるが、搅乱部で不明な部分もある。



第7図 SB02実測図 (S=1:60)

ため、SB02としては2間×1間の建物とした。ビットからは須恵器と土師器の破片が少量出土している。

遺物（第8図）1は製塙土器の破片である。厚手の器壁で口縁端部内側に面を作り、内外面とも指ナデの成形痕が残る。2は須恵器環の底部で、底面は回転糸切り離しである。3は拳大の碟で、方形に加工した痕が見られる。一部焼成を受けて黒変している部分がある。1、2は8・9世紀代の所産であることから、SB02は奈良・平安時代の建物跡と考えられる。

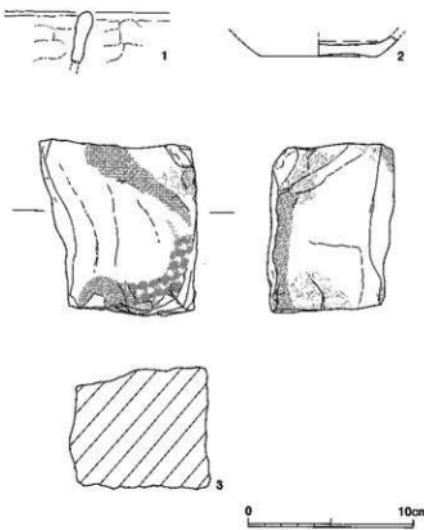
### SB03（第9図）

5・6・7グリッドで検出した掘立柱建物である。不整円形のプランを呈し、深さ20~40cmのやや小型の柱穴である。東側と北側に広がる搅乱のために、対応するビットが見あたらないが、1間約2mを測り、南北4間（8m）×東西2間（4m）以上の規模になると思われる。南北を軸とすると、N-4°-Eを指向する。ビット内からは土師器の小片がわずかに出土するのみで、時期を特定するのは難しい。SD04を切ることから、おそらく奈良・平安から中世にかけての建物と考えられる。

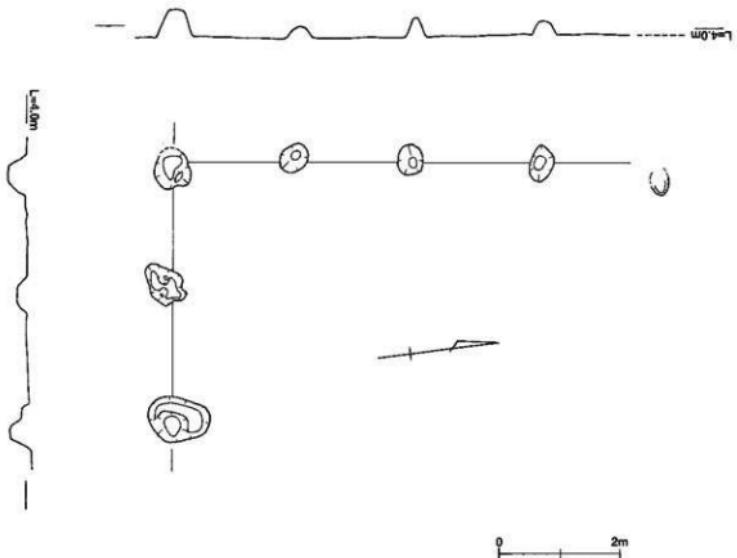
### 3. 井戸

#### SE01 (第10図)

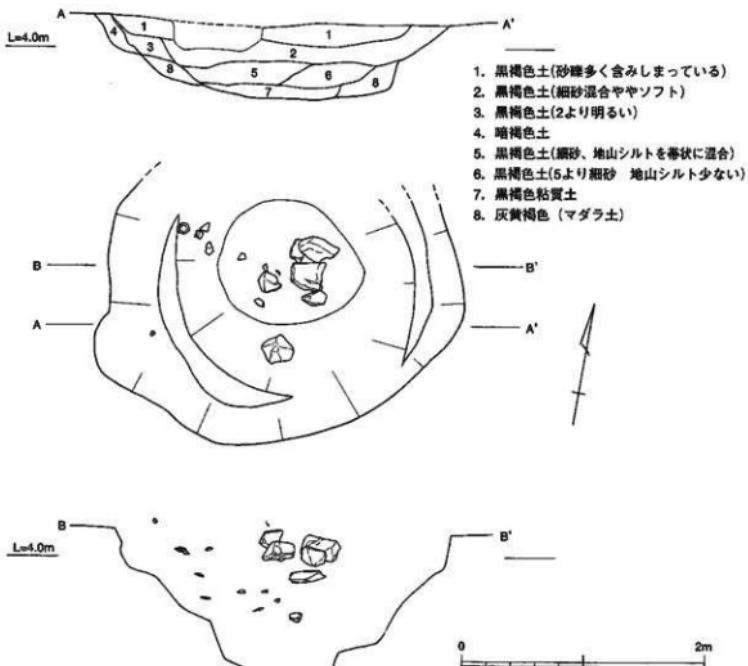
調査区の南側、1グリッドで検出した井戸である。径約3.0mのほぼ円形プランを呈し、深さ1.2mを測る。人頭大の礫が中央部の上層でかたまって数個出土しており、廃棄後に埋まったと考えられる。鉢状の掘り方を成し、漏斗状にやや落ち込んだ中心部から湧水することから、この水溜部に何らかの施設があつた可能性が考えられる。土層断面の観察からもその存在が窺えるが、井戸側等は検出しなかった。覆土からは中世末期と思われる土師器が上層から数点出土している。井戸廃絶後に埋まったものと思われ、4、5グリッドにあるSK01、02と同時期の遺構と考えられる。



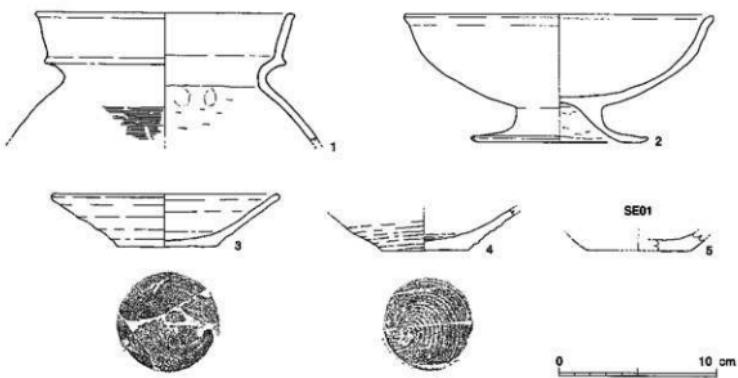
第8図 SB02出土遺物実測図 (S=1:3)



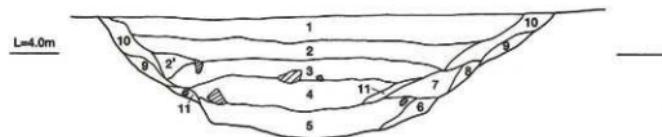
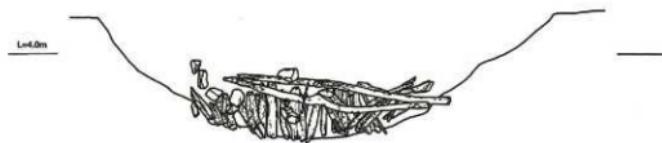
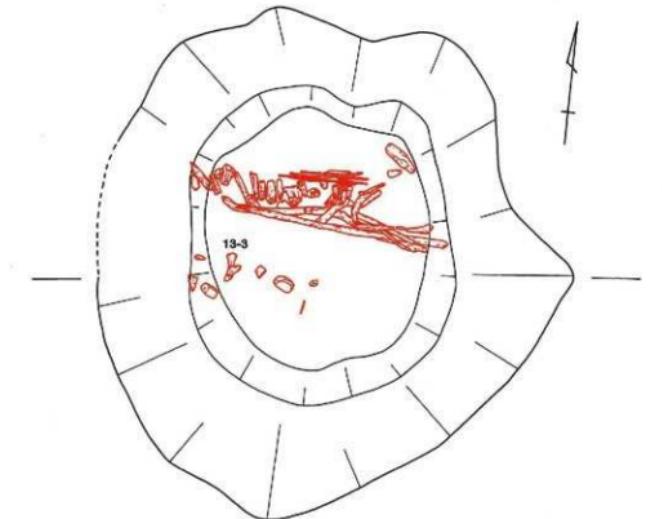
第9図 SB03実測図 (S=1:80)



第10図 SE01 実測図 ( $S=1:40$ )



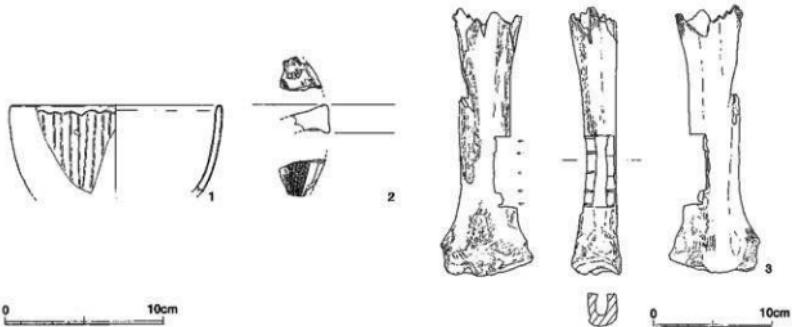
第11図 SE01出土遺物実測図 ( $S=1:3$ )



- |                       |                         |
|-----------------------|-------------------------|
| 1. 黒褐色土 (砂礫含む 固い)     | 6. 黒褐色土 (やや砂質)          |
| 2. 黒褐色土 (1より、ややソフト)   | 7. 黑褐色土 (粘性中ソフト)        |
| 2'. 黑褐色土 (2より、明るくソフト) | 8. 黑褐色土 (7よりやや砂質)       |
| 3. 黑褐色土 (粘性中 ソフト)     | 9. 嗜灰黄色砂質土              |
| 4. オリーブ黒色粘質土 (腐植植物含む) | 10. 灰黃褐色土 (地山シルトブロック含む) |
| 5. 黑色粘質土 (木片少し含む ソフト) | 11. 嗜オリーブ褐色土 (マダラ土)     |



第12図 SK01実測図 (S=1:40)



第13図 SK01出土遺物実測図 (S=1:3 3はS=1:4)

#### SE 01 出土遺物 (第11図)

1は複合口縁の甕で、口縁端部に平坦面を持つ。外面は横方向の刷毛目、内面は頸部以下に横方向の削りを施す。頸部に弱い指頭痕が認められる。草田7期に当たるものと考えられる。2も草田7期に相当すると思われる土師器の低脚環で、環部は内湾して立ち上がり、端部は丸く収めて緩く外反する。内面にはミガキを施したような痕が見られる。脚部はやや裾広がり気味に開く。3～5は土師器の环である。精製された土を用い、ロクロ成形時のヨコナデ痕がよく残っている。底部は回転糸切り離しで、体部は直線的に開き、器高が低い。3は16世紀後半と考えられ、姫原西遺跡C区3号墓出土の土器に類似する<sup>(4)</sup>。4は中世末、5は15～16世紀代の所産と考えられる。

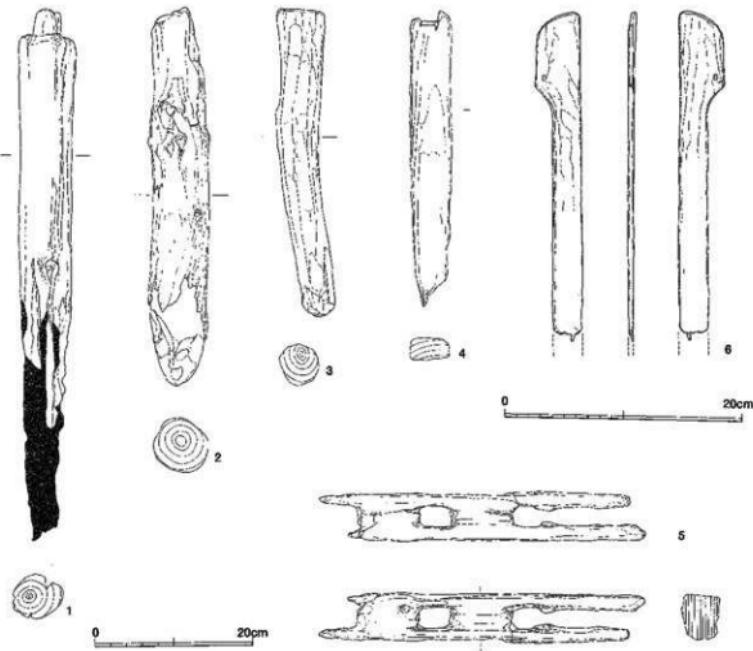
このうち1、2は弥生時代終末から古墳時代初頭の古式土師器である。下層からの出土ではあるが、近くで検出したSD28に同時期の遺物が見られることから、混入と考えられる。下層からは須恵器・土師器の破片が多く出土しており、SE01は16世紀後半には埋没したものと考えられる。

#### 4. 土坑 (12～21図)

##### SK01 (第12図)

C4、5グリッドで検出した土坑で、径3.5m～4.0mの不整円形プランを呈し、深さ約1mを測る。東西方向に平行して走るSD01、02を切って掘られている。中層から下層に至るレベルで馬または牛の骨と思われる骨が出土しており、廃棄時の祭祀において使用された可能性がある。底面に杭が打ち込まれ、自然木・加工木材を横木として使用した柵状の施設が構築されていた。柵状の施設の上面まで4、5層の粘質土が堆積しており、廃棄後1～3層の黒褐色土が平準に埋まつたものと考えられる。井戸枠等は検出されなかった。荒砂層まで至り湧水するが、井戸とは考え難い。おそらく、湧き水を溜めながら柵状の部分で水を汲み上げ、配水したものと考えられる。

覆土からは、土師器の破片とともに青磁碗の破片が若干出土している。中世の水溜配水用の土坑と考えられる。

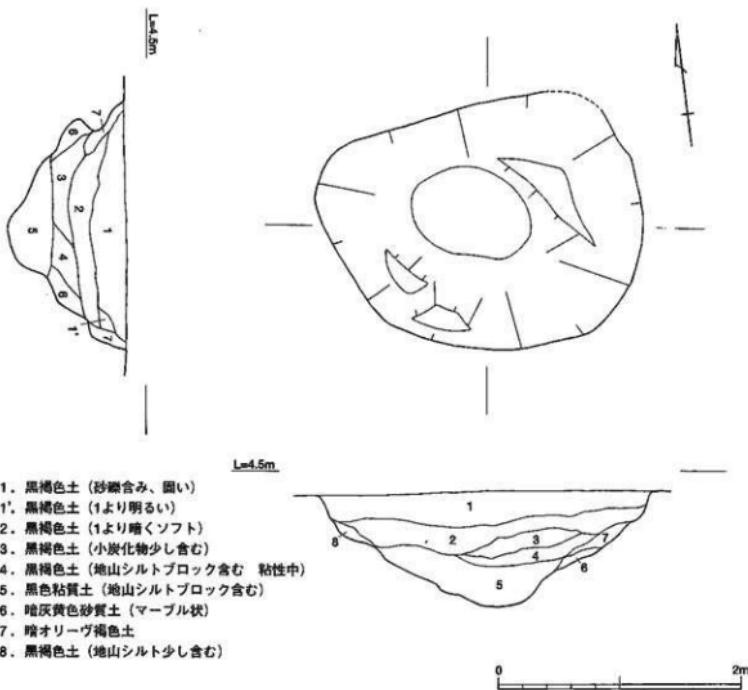


第14図 SK01出土木製品実測図 (S=1:6 6はS=1:4)

#### SK01出土遺物（第13.14図）

13—1は線描きの蓮弁文をもつ青磁碗の破片である。13—2は壺または鉢の口縁部破片で、上面に菊花文様のスタンプ文が施される。13—3は骨材を採取した、牛または馬の大腿骨と考えられる。遺構の中中央部、樋状施設の内側4層（オリーブ粘質土）から出土した。骨の中央部に長さ6cm、深さ1.5cmにわたって、鋸状工具で切り取った痕が見られる。内側に3ヶ所の切れ込み痕があることから、4個（または4回）分を切り取ったものと思われる。切り取られた部分は「U」字形を呈し、製品は不明であるが、武具の材として使用されたものと考えられる。鎌倉「長谷小路周辺遺跡」など中世の遺跡で出土例が報告されている<sup>⑨</sup>。

第14図は木製品である。14—1～3は樋状の施設を構築する材で、縱杭として使用されたものである。14—1は先端を焼いて尖らせたための焦げが見られる。元部はほぞが作られている。14—2は丸太を削ったもの、14—3はその皮を剥いだやや小型のものである。14—4は一方にはほぞ穴を設けた角材である。14—5は8cm間隔に4×2.5cmの方形のほぞ穴を穿ったもので、横軸材として使用されたものであろうか。14—6はヘラ形を呈すもので、ヘラ部分に径数mmの穴が穿たれている。おそらく御敷きの底板をヘラ状木製品に転用したものと思われる。



第15図 SK02実測図 (S=1:40)

#### S K 0 2 (第15図)

S K 0 1 の南に隣接して検出した土坑である。長径2.6m、短径2.0mの楕円形プランを呈し、深さ1m弱を測る。掘り鉢状の断面を呈し、底から著しく湧水する。井戸枠等の施設は検出しなかったため、素堀の井戸と考えられる。

遺物は図化できる個体はなかったが、上層から下層まで須恵器や土師器の破片を出土する。赤色塗彩された土師器小片も若干見られるが、時期を決定する遺物はないため、奈良・平安時代から中世の遺構と考えられる。おそらく、S K 0 1 と同時期の遺構と思われる。

#### S K 1 0 (第16図)

D14グリッドの東壁近くで検出したピット状の土坑である。径1.0mのほぼ円形の平面プランを呈し、深さ50cmを測る。底面に根石と思われる平板な礫（長さ40cm、厚さ14cm）が置かれている。

覆土からは上層から下層にかけて、須恵器・土師器の破片が出土している。17-1は輪状摘みを持つ須恵器の蓋で、口縁の返りはやや大きい。8世紀前半の所産と思われる。17-2も須恵器の蓋であるが、口縁の返りはなく輪状または擬宝珠状の摘みが付くものと思われる。17-3は高台を持つ須恵

器壺の底部で、回転糸切り痕が残る。8世紀後半の所産と考えられる。17-4~6は外外面に赤色塗彩された土師器の破片で、17-6は高台付の壺または皿と思われる。これらはいずれも8~9世紀のものと考えられる。

覆土のうち5~10層は柱の埋め土と思われ、SK10は奈良・平安時代の柱穴跡の可能性が考えられる。しかし、対応するピットが周辺に確認できなかつたため、土坑として扱った。おそらく調査区外へ展開しているものと思われる。

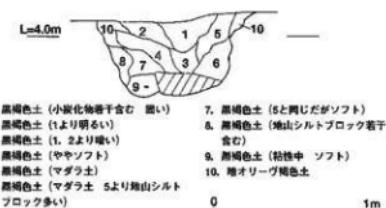
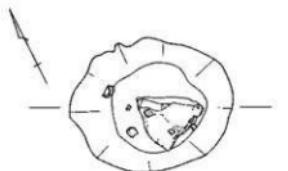
#### SK17（第18図）

C2グリッドで検出した遺構で、SD03を切って掘り込まれている。径約2.0m、深さ約60cmを測る土坑で、不整円形プランを呈す。底面は凹凸があり、中心部がやや深くなっている。

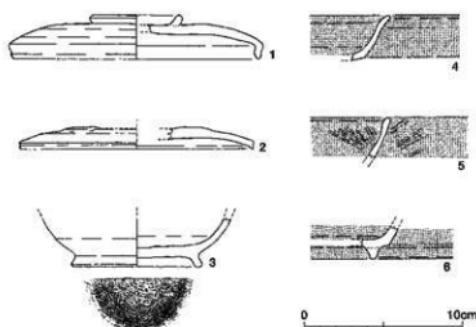
遺物は土師器の破片が若干出土している。図化できなかつたが、16世紀代のものと思われる壊破片が1点見られることから、中世末の土坑と考えられるが、遺構の性格は不明である。

#### SK18（第19図）

SD23の東E・F2グリッドで検出した浅い土坑である。半楕円形の平面プランを呈すが、南側が細くなってしまい、溝になる可能性も考えられる。しかし、攪乱よって破壊されているため、形状がはっきりしない。北側は調査区外へ広がるものと考えられる。検出面で最大幅2.0mを測り、長さは2.5m以上になるものと思われる。深さは、0.2m程度であるが、中央部が深さ45cm程度落ち込んでおり、中型の須恵器甕（20-1）が1個体口縁を上にした状態で出土している。押しつぶされたような格好で口縁の一部を欠いているが、ほぼ完形に復元できた。落ち込み内に埋納されたものと思われる。覆土からは土師器の破片がわずかに出土している。検出時にこの甕のものと思われる須恵器の破片を採取していることか

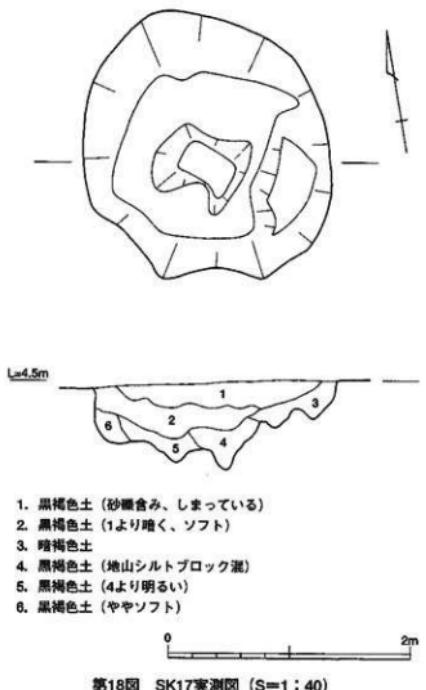


第16図 SK10実測図 (S=1:30)



第17図 SK10出土遺物実測図 (S=1:3)





第18図 SK17実測図 ( $S=1:40$ )

区においてこの1点のみである。3は須恵器の蓋で、外面に幅3mmの沈線が1条巡る。6世紀代の所産と考えられる。

### S K 1 9 (第21図)

E 2グリッドで、S D 2 3の東肩を切る形で検出した土坑である。長径1.5m・短径0.9mの楕円形プランを呈し、深さ30cmを測る。柱穴とした場合、対応するピットが見あたらない。遺構の性格は不明であるが、遺構内から土師器の壺(21-1)が1点ほぼ完形で出土している。体部は直線的に開き、底径に比して器高はやや低い。底は回転糸切り離しで、輪轆成形の指なでの痕が顕著に見られる。形状から、9世紀後半の所産と思われる。同様の壺は、第1次調査(平成6年度)においても出土しており、当該期の遺跡の拡がりを考察せるものである。

### 黒色土落ち込み(第3図)

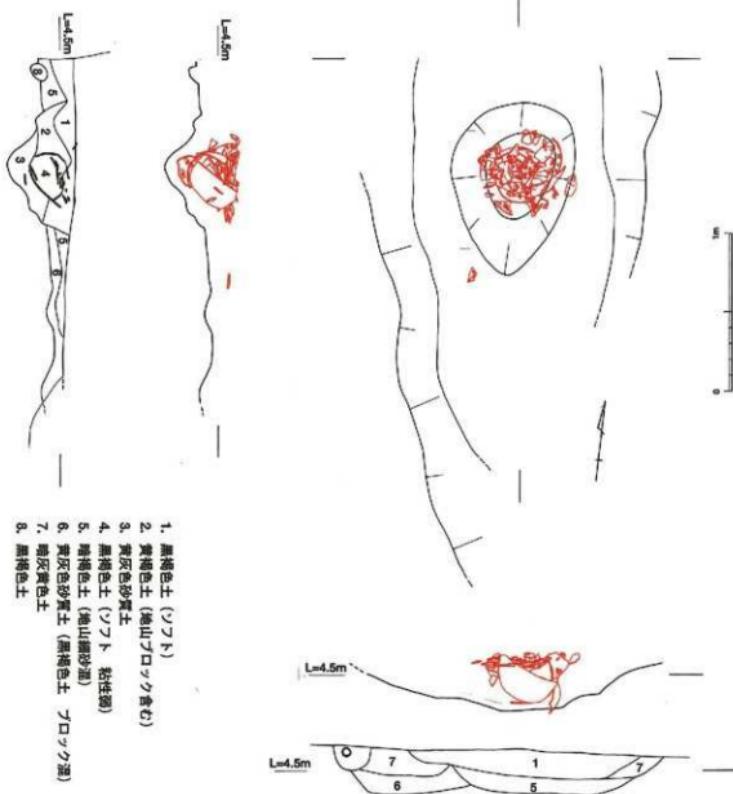
遺構としてはとらえなかったが、7. 8グリッドで黒褐色土の落ち込みを検出した。搅乱により上層のほとんどを破壊されているため、正確な形状・規模を掌握できない。S D 0 5に沿うような形で半円形のプランになると思われ、東の調査区外へ広がる。緩やかに下り、約60cmの深さになる。砂礫

ら、上面は後世に削平されているものと思われる。遺構の性格は不明だが、時期は甕の形状から古墳時代後期(6世紀後半)の範疇に入るるものと思われる。

### S K 1 8 出土遺物(第20図)

1は中型の須恵器の甕である。口径21.6cm、器高55.2cmをはかり、中心よりやや上に最大胴部径(46.9cm)がくる。口縁は緩い段を持って短く外反する。丸底であるが焼成時に変形している。肩部には自然釉が付着し、焼成時の剥離痕が一部見られる。調整は内面に円形當て具痕が、外面は平行タタキが施され、胴下半部に弱いカキメを施す。6世紀後半の所産と考えられる。2は弥生土器の甕で、口縁は「く」の字状に屈曲する。端部を丸く收め、胴部がやや張る。調整は風化のためはっきりしないが、内面に刷毛目が残り、頸部外面には成形時の指圧痕が見られる。松本III-

1様式に相当するものと考えられる<sup>(1)</sup>。混入と思われるが、弥生中期中葉の土器は本調査



第19図 SK18実測図 (S=1:30)

を若干含むものの、均一に黒色土が堆積し、下層は粘質土になる。

遺物は土師器の小片がわずかに見られる程度で、時期は不明である。しかし、SD 04、05に切られることから、奈良・平安時代以前には黒色土が堆積していたものと考えられる。ただ、SD 10との切り合いは搅乱のため確認できず、落ち込みとしての時期は不明である。

5. 溝（第3、22~31図）

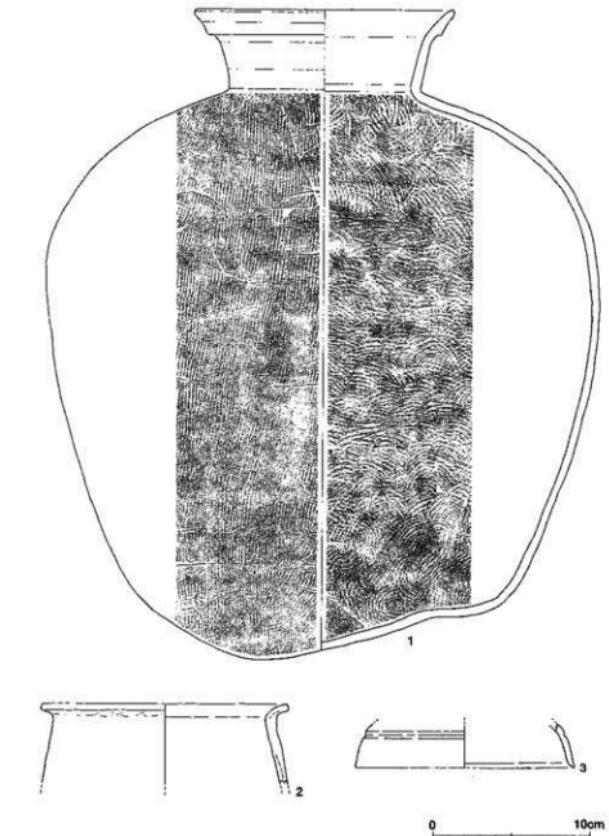
SD 01. 02 (第3図)

SK 01. 02に切られるかたちで検出した、東西方向にほぼ平行に走る溝状遺構である。この2本の溝は、ともに幅0.6~1.2m、深さ30~60cmを測り、逆台形の断面を呈す（第27図）。2本の溝の間隔は約3mを測る。溝の方向はSD 11. 18. 19. 22と同方向になる。

覆土からは土師質片・須恵器片がわずかに出土しており、奈良・平安時代から中世にかけての遺構と考えられる。性格としては利水目的の溝が考えられるが、区画溝としての機能も推察される。

SD 03 (第22図)

1~5グリッドまで調査区をほぼ南北方向に走る溝で、東西方向に走るSD 01. 02に対して直交するように交差している。幅1.3m、深さ35cmを測り、溝の断面は逆台形を呈す。SK 01. SD 01に切られるため、一部の検出にとどまり、SK 01の北側で検出したSD 05に統くかどうかは不明である。3. 4グリッドでは約3.5m西にあるSD 04と平行して走る。南側で西に分かれるが、攪乱のため方向ははっきりしない。



第20図 SK18出土遺物実測図 (S=1:3 1はS=1:4)

覆土からは、須恵器・土師器・赤色塗彩土師器の破片がわずかに出土する。時期を決定する資料に乏しいが、新しい遺物を含まないことや、北側でSD 01. SK 01に、南側ではSK 17. SD 2. SE 01に切られることなどから古代の溝と考えられる。

### SD 04 (第22図)

調査区のB 3グリッドからC 6グリッドにかけて検出した、調査区を南北方向に直線的に走る溝で、幅1~1.2m、深さ50~60cmを測る。断面はやや袋状の「U」字形を呈し、東のSD 03に平行する。砂礫を多く含む覆土であり、中・下層に砂礫ブロックを含むことから、水が流れていたことが窺え、急激に埋没したものと考えられる。底面のレベルは南から北へ向かって緩やかに下っている。

弥生土器・須恵器・土師器甕・赤色塗彩土師器片などが若干出土しているが、図化できたものは2点のみであった。28-1は、口縁に2条の凹線を施す弥生時代中期後葉の甕破片で、混入と思われる。28-2は、須恵器壺の口縁部で奈良時代のものと思われる。造構の時期を決定するのは難しいが、中世末から近世初頭にかけての溝と考えられるSD 01. 02に切られることとあわせ、SD 03と方向を同じくすることから、奈良・平安時代の溝と考えられる。12グリッドから北で検出したSD 12. 13と方向や形態が類似しており、灌漑用の溝が推定される。

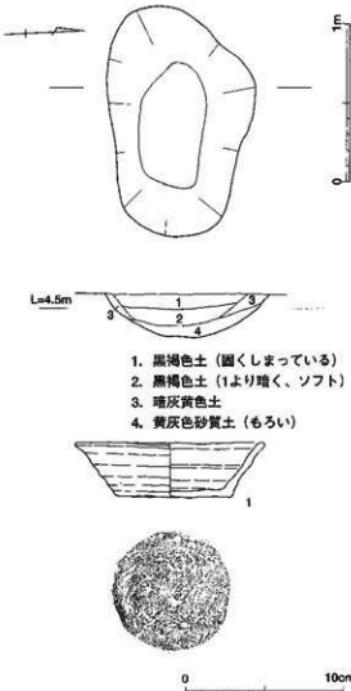
### SD 05. 06 (第3図)

5グリッドから8グリッドにかけて検出した細い溝状造構で、SD 05. 06とも幅0.5~0.7m、深さ20~40cmを測る。ほぼ平行にやや東側に弧を描いて走り、北側はとともに攪乱で切られている。SD 06は南側で調査区外へ展開していき、SD 05は南側でSD 04に切られ、SK 01に切られて消失する。SK 01の南側で検出したSD 03につながるものかどうかは不明である。

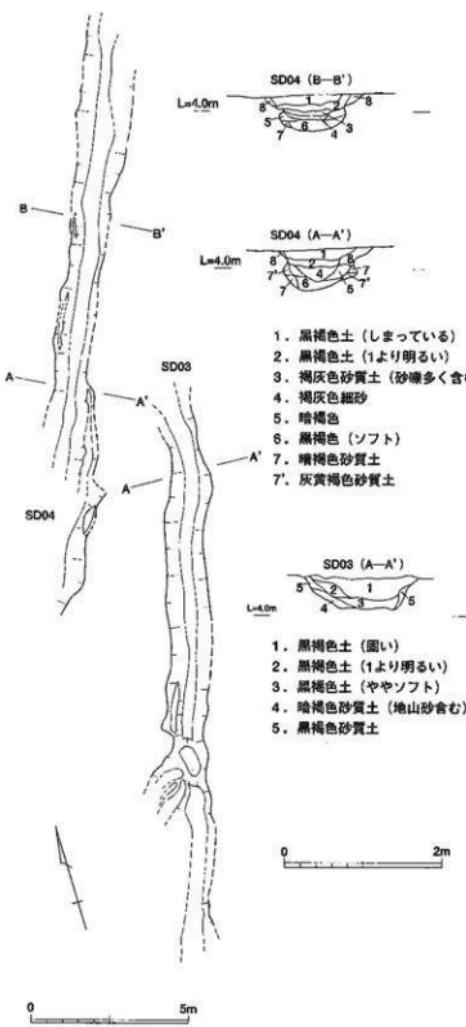
覆土からは土師器破片がわずかに見られるのみで図化できるものはない。SD 04やSB 03のピットに掘り込まれることから、それらより古いと考えられるが、時期は不明である。

### SD 08. 09 (第23図)

B 9・10グリッドで検出した、約0.8m間隔でほぼ平行して走る溝状造構である。SD 08は幅0.6~1.0m、SD 09は幅0.8~1.2m、深さ30~50cmを測る。ともに南側を攪乱により破壊されている。SD 08はSD 06につながる可能性も考えられるが、確定できない。北側も攪乱により、消失しているが、調査区外へ続くものと思われる。方向はSD 09がN-22°-W、SD 08はやや西へ振って、N-24°-Wを指向する。



第21図 SK19実測図 (造構S=1:30 遺物S=1:3)



第22図 SD03.04実測図 (遺構S=1:150 土層S=1:60)

SD09の上層から、ほぼ完形の状態で土師器の壺(28-3)が1点出土している。8世紀後半から9世紀にかけての壺と思われ、口径12.6cm、器高3.6cmを測る。底部はやや丸みを持ち、削り後ナデて仕上げる。全面に赤色塗彩され、色々ちや摺れが見られないことから、ほとんど使用されていないものと思われる。奈良・平安期の溝と考えられる。

#### SD10 (第24図)

B8～C9グリッドで検出した南北から北東方向に走る溝である。幅は南側で1.2m、北側で2.2mを測り、北に向かって広がるが、底面幅は30～40cmである。深さは40～50cmで、断面は鉢状を呈す。搅乱により大部分が削られるため一部の検出にとどまり、正確な形状が把握できないが、やや東方向に湾曲している。覆土はややソフトな黒褐色土で、砂礫はあまり含まない。

須恵器・土師器破片が若干出土するが、小破片で時期を決定するものはない。SD05、06、11に切られるため、これらより古いと考えられる。南で検出したSD04と同方向になるが、同時期の溝かどうかは不明である。

SD04とは垂直方向で約7m離れている。

#### SD11 (第3図)

B・C9グリッドで検出した細い溝状遺構で、SD01、02と同じ東西方向に走っている。幅0.7～1.1m、深さ40cm弱を測る。逆台形の断面を呈し(第27図)、覆土からは須恵器と土師器の小片が

わずかに見られるのみで、時期を決定する遺物は出土していない。SD08, 09を切り込んでいることや、形態・方向がSD01, 02や他の東西方向の溝状遺構と同じであることから奈良・平安時代から中世の遺構と思われる。

### SD12, 13 (第25図)

B12グリッドからE16グリッドにかけて検出した溝状遺構である。幅はSD12が0.9~1.6m、SD13が0.5~1.4mで、深さはともに10~30cmと浅く、ほぼ同規模・同形態を呈している。断面は皿状で、底面は凹凸が見られる。北側が浅くなるのは後世の削平によるものである。この2条の溝は所々攪乱により分断されるが、1.6~1.8m間隔で平行して、調査区の北側約3分の1の長さをほぼ南西方向から北西方向に向かって走っている。わずかに東側に弧を描いているが、これは当時の地形に沿う形と考えられる。北側はSD18, 19に切られ、南側は攪乱により破壊されているが、調査区外へ延長していくものと思われる。

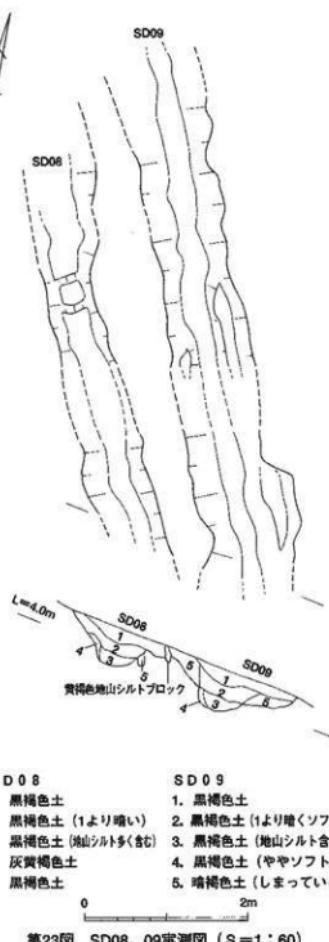
遺物は須恵器と土師器の破片をわずかに出土する。赤色塗彩された土師器の壺や、回転糸切りの底部片などが見られることから、この2条の溝状遺構は古代の水利目的に使用された溝ではないかと思われる。

### SD12, 13出土遺物 (第28図4~8)

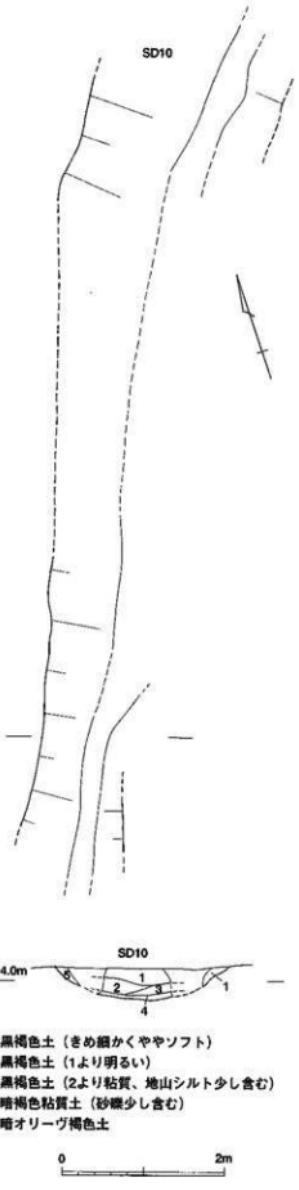
4は須恵器壺の口縁部、5は小さな返りを持つ須恵器蓋の破片である。6は回転糸切り離しの土師器壺の底部、7は口径25.4cmを測る土師器の壺である。8は内湾して立ち上がる須恵器の壺である。これらの遺物は8世紀後半から9世紀にかけてのものと考えられる。

### SD15 (第26図)

B10グリッドで検出した溝状遺構である。東西方向からやや北にふって走る。方向としてはN-56°-Eを指向し、同方向の溝は本調査区においては他に見られない。北側のほとんどと東側を攪乱により破壊されており、下層部がわずかに残存している状況で、遺構の性格をつかみきれない。また、一部をSD08, 09に掘り込まれるため、全体の形態を掌握しきれないが、検出面で幅1.5m、深さ



第23図 SD08, 09実測図 (S=1:60)



第24図 SD10実測図 (S=1:60)

40cm前後を測り、実際はそれ以上の規模になると考えられる。断面も攪乱のため一部分の観察にとどまったが、おそらく逆台形の断面形を呈するものと思われる。

黄褐色の地山シルトを若干含む覆土で、下層から黒曜石の小型無茎石鏃(28—10)が1点出土している。しかし、他に土師器の小片がわずかに出土するのみで、時期を決定する資料に乏しい。

#### SD18・19(第3図)

調査区の北端である16.17グリッドで検出した浅い遺構で、調査範囲外へ展開するものと思われる。調査範囲内では当初、1.5m幅で検出されたが、掘り下げていく段階で深さ30cm弱の2本の細い溝に分かれ、北側をSD19とした。平面プランではSD18と19の新旧関係ははっきりしなかったが、土層の観察(第27図)ではSD18がSD19を切って掘られていることから、SD18は19の掘り直しと考えられ、その時期差は短かったと思われる。

覆土からは、須恵器や土師器が若干出土しているが、図化し得たのは須恵器の高杯(28—9)のみである。脚部に長三角形の2方透かしが入るものであるが、混入遺物と考えられるため、遺構の時期を決める指標とはならない。青磁器の小破片を含むこと、また、古代の溝状遺構であるSD12、13を切っていることから中世の遺構と考えられる。SA01、SB01と軸方向が合致しており、これらの遺構に合致した建物を区画する溝の可能性を考えられる。

#### SD20(第3図)

調査区南西端のA1、2グリッドの西壁際で検出した、幅0.8m、深さ約40cmを測る溝である。断面は逆台形を呈す。遺物は土師器片をわずかに出土する。南北に走り、SD04の方向とあってはいるが攪乱により寸断しているため、SD04とのつながりは不明である。SD03とも方向を同じくすることから、同時期の溝と考えられる。

### SD 21, 22 (第3図)

A・B・Cグリッドで検出した、ともに幅約1.0m・深さ50cmを測る溝で、東西方向に平行して走っている。断面は逆台形を呈す。(第27図)2本の溝の間隔は約3.0mである。

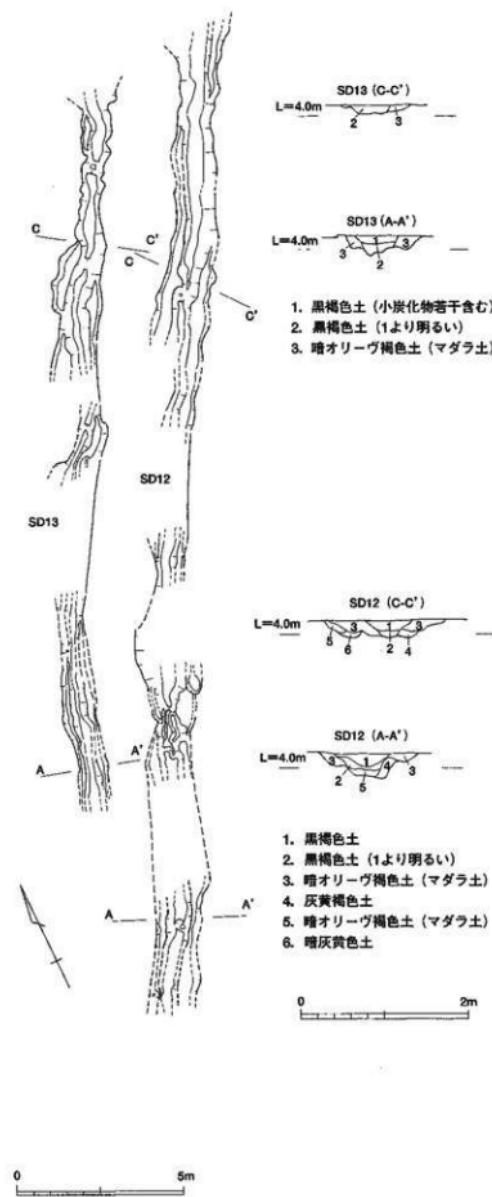
SD 21は調査区の南西端での検出で、2mほどの調査に止まったが、攪乱に一部を削られ、SD 20を切っている。

SD 22は南北方向の溝であるSD 03, 20を切っているが、SE 01に切られる。遺物は土師器片をわずかに出土するのみで時期ははつきりしないが、SD 01, 02と規模・方向を同じくすることから、中世の区画的な溝ではないかと考えられる。

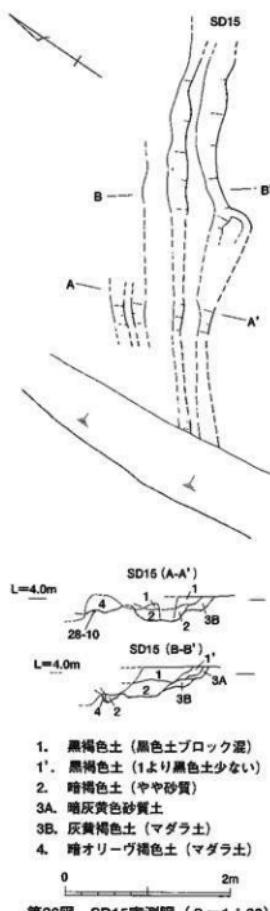
### SD 23 (第29図)

調査区の2, 3グリッドを南北方向に走る溝状遺構である。南側は東肩を攪乱により削られるが、約11mの長さを検出し、南北の調査区外へ続くものと思われる。幅は約3.3mあり、断面は鉢状を呈す。深さは80cmを測るが、上面は後世に削平されており、実際はもう少し深かったと思われる。

土層の観察から、何回かの掘り直しが行われたことが窺える。12~14層の堆積する溝(旧SD 23)が始めに掘られ、その後8~11層の溝(新SD 23)に掘り直され、最終的に浅く幅広の溝となり、1~7層が堆積して埋まると考えられる。旧S



第25図 SD 12, 13実測図 (遺構 S=1:150 土層 S=1:60)



1. 黒褐色土（黒色土ブロック泥）  
1'. 黒褐色土（より黒色土少ない）  
2. 暗褐色土（やや砂質）  
3A. 暗灰褐色砂質土  
3B. 反黃褐色土（マダラ土）  
4. 暗オリーブ褐色土（マダラ土）

第26図 SD15実測図 ( $S=1:60$ )

の遺物を欠いているが、SD23は中期後葉から後期前葉に築かれ、何回か掘り直しされながら継続して使用され、古墳時代前期前葉に至って廃棄されたものと考えられる。

#### SD23出土遺物（第30.31図）

30—1. 2は弥生時代後期前葉の壺の口縁部である。1は3条、2は5条の擬凹線を複合口縁に施す。1は新SD23の下層からの出土である。

30—3～6は複合口縁細頸壺で、3. 4は口縁端部上面に平坦面を作る。5. 6の口縁端部は外側にやや肥厚して面を作る。6の頸部には板状工具による有軸羽状文が施される。2条の沈線により区画され、上段の刺突文が下段よりやや長い。頸部内面には指のなでつけ痕が見られ、頸部以下はヨコ

D23・新SD23とも下層は砂質土で、急激に埋まったものと考えられる。

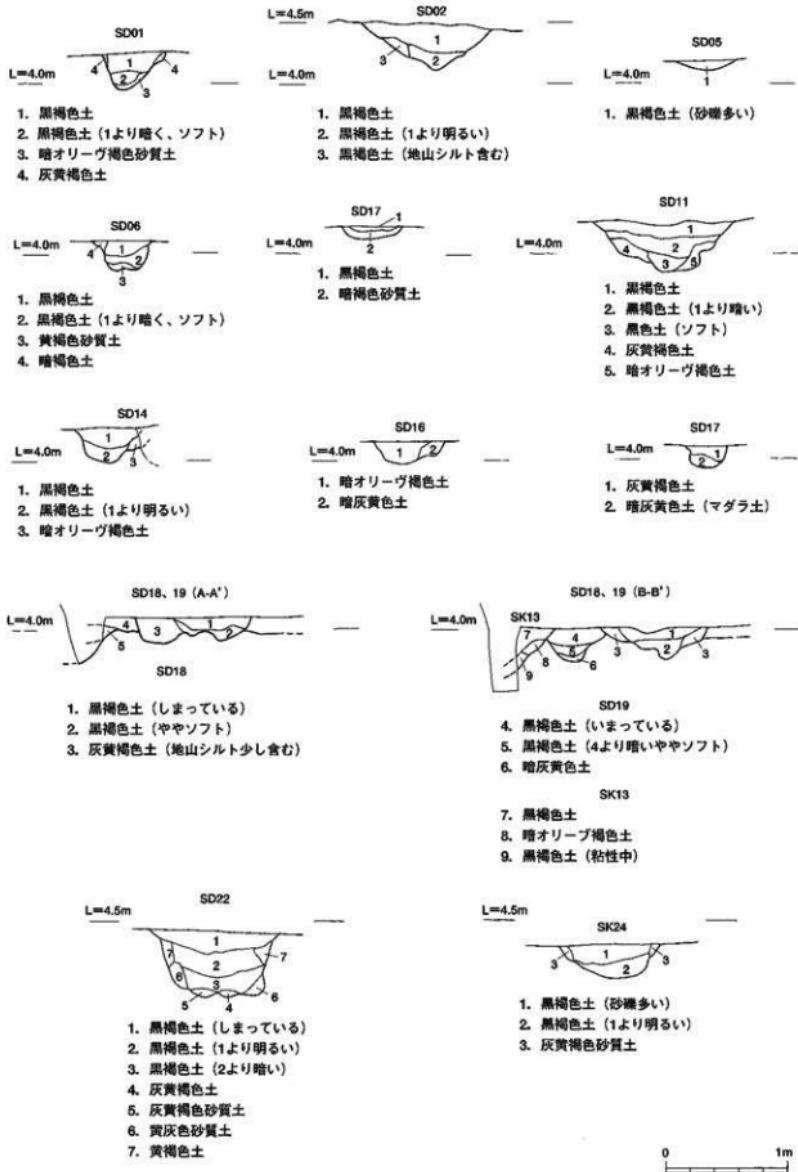
遺物は溝の中央部分で出土している。上層から中層にかけて多く見られ、弥生時代後期前葉の土器片をわずかに含むが、ほとんどは終末期から古墳時代前期前葉にかけてのものである。上層及び下層（砂質土）から、幾内系土器（布留壺）の破片が何点か出土している。上層・下層とも遺物の時期差はほとんどみられないため、溝の埋まった時期もこの時期と考えられる。

布留壺の口縁は「く」の字状に外反して開くものがほとんどである。口縁端部は丸みを持つもの、面を作るものとがある。また、複合口縁細頸壺が何点か出土している。頸部には板状工具で刺突した羽状文が施され、中心に沈線を巡らし有軸としたものも見られる。複合口縁細頸壺はほとんどが草田6期新から7期にかけてのものである（小谷1～2期）<sup>⑦</sup>。高坏も数点出土しているが、同時期のものと思われ、小谷1～2期に相当する<sup>⑧</sup>。小谷3期に入る遺物は見られない。

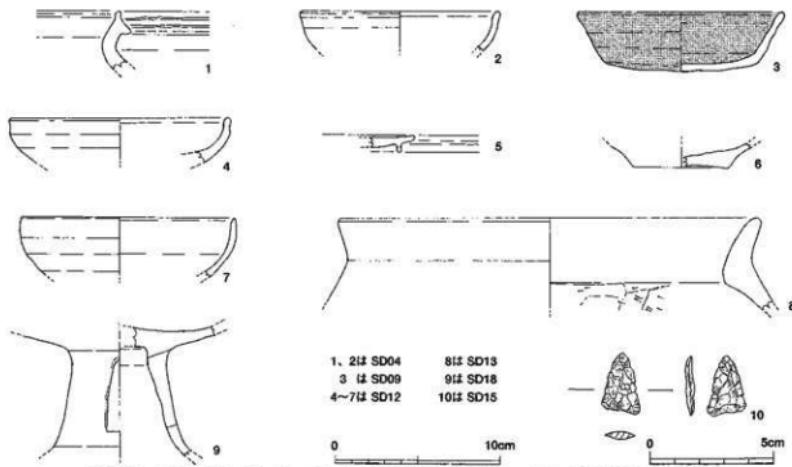
SD23から出土する土器（壺・壺類）は上・下層とも草田7期に相当するものがほとんどであるが、掘り直し後の層からは草田6期の遺物も含まれる。これは、旧SD23に埋まっていたものが掘り返され、横に盛土され置かれたものが、新SD23の廃棄時に溝内に埋没したものと考えられる。

弥生時代後期前葉の土器は草田1から2期にかけてのものである。中期後葉の土器片を若干出土するが、溝を掘りなおした際に混入したものと思われる。弥生時代後期中葉

の遺物を欠いているが、SD23は中期後葉から後期前葉に築かれ、何回か掘り直しされながら継続して使用され、古墳時代前期前葉に至って廃棄されたものと考えられる。



第27図 溝状堆積土層図 (S=1:40)



第28図 SD04、09、12、13、15、18 出土遺物実測図 (S=1:3、SD15はS=1:2)

方向の削りが施される。これらの壺は草田7期に相当する。

30—7～11は複合口縁の壺である。口縁端部をやや外側に引き出し、面を作る。稜の突出は鈍い<sup>(9)</sup>。9の肩部には幅1cmの刷毛状工具による波状文が巡る。11の体部はほぼ球形であるが、器壁が薄く、底部は径4.0cmほどの平底の痕跡を残す。外面の調整は肩部から胴部上半はヨコ刷毛目、胴下半はタテ刷毛目が施され、下半以下ははっきりしない。内面の調整は頸部下はヨコ方向の、肩部から胴部は斜め方向の削りが施され、胴下半から底にかけては指によるなでつけ痕が見られる。これらの壺のうち7、8、9は草田7期、10、11は草田6期新段階に相当すると考えられる。

31—1はやや内傾する複合口縁の壺で、口縁端部に面を持つ。稜は指でひねり出したように突出し、肩部外面に1cm幅の弱い刷毛目が巡る。

31—2、3は布留式壺の流れを汲む単純口縁の壺で、「く」の字状に外反する口縁の端部は丸く收める<sup>(10)</sup>。31—3は、荒いタテ方向の刷毛目で調整された肩部に、ヘラ描きの直線文が施される。31—4は台付壺と思われる。器壁はやや厚く、黄褐色を呈する。球形の胴部に低脚壺の脚のような台が付くもので、肩部以上を欠損しているため器種は不明である。池田満雄氏の報告にあった脚付壺によく似ているが、その口縁は複合の直口壺である<sup>(11)</sup>。また、類似する台付土器は鹿島町の「南講武草田遺跡」からも出土しているが、その上部は複合口縁壺の様相を呈するものである<sup>(12)</sup>。

31—5、6は高壺の壺部で、口縁端部に面を作る。6は段を有する。5の外面、6の内面にタテ方向のヘラミガキが施される。31—7は低脚壺の脚部である。内面に2本のヘラ描きの沈線が見られる。他に鼓形器台の脚部内側に線刻が施されたものがわずかに見られた。前述の池田満雄氏の報告にあった脚付壺にも、2本線が刻まれているとあり、このようなヘラ描き沈線は、使用目的や土器制作者の何らかの意図を表した記号と考えられる。

31—8は小型の蓋で、IHSD 2 3の下層から出土している。31—9は口径12.0cm、器高4.8cmを測る



第29図 SD23実測図 ( $S = 1:60$ )

楕形の坏である。底部は削り後なでられたと思われ、削り痕が残り内湾して立ち上がる体部はヨコなので調整で、口縁端部を尖り気味に仕上げる。この楕形の坏は、天神遺跡・古志本郷遺跡で出土したものと同型と思われる<sup>(13)</sup>。31-10は高坏と思われるが、坏部上半と脚部下端を欠損している。坏部内外面、脚部外面に細いミガキが施され、脚部には円形の透かしが穿たれる。脚の接合法は在地のものとは異なり、坏の中心部に脚をそのまま压着した様である。31-11は低く裾広がりに開く、畿内系高坏の脚で、浅い橙色を呈す。小型の楕状の坏が付くと考えられる。これらの土器のうち30-1と31-1、2、10は新SD23下層から出土している。

本調査地から約20m南に位置する、四絡幼稚園改築事業に伴う第4次発掘調査地において、南北方向に走る溝状遺構SD04を検出した。方向的にはSD23の延長上に位置し、規模・形態や時期も類似していることから、同一の溝と考えられる。既存の道路により分断されているが、このSD23と第4次調査区のSD04をつなぐと、右にわずかに湾曲しており、「環濠」の様相を呈している。

ただ、溝の東側（内側）または西側（外側）では当該期の住居跡等は確認されていない。第4次調査区のSD04から西15mには同軸方向に走る溝状遺構SD03があり、やはり同じように右方向にわずかに曲がっている。これらの溝状遺構の状況については、第4次発掘調査報告書<sup>(14)</sup>において詳解されている。

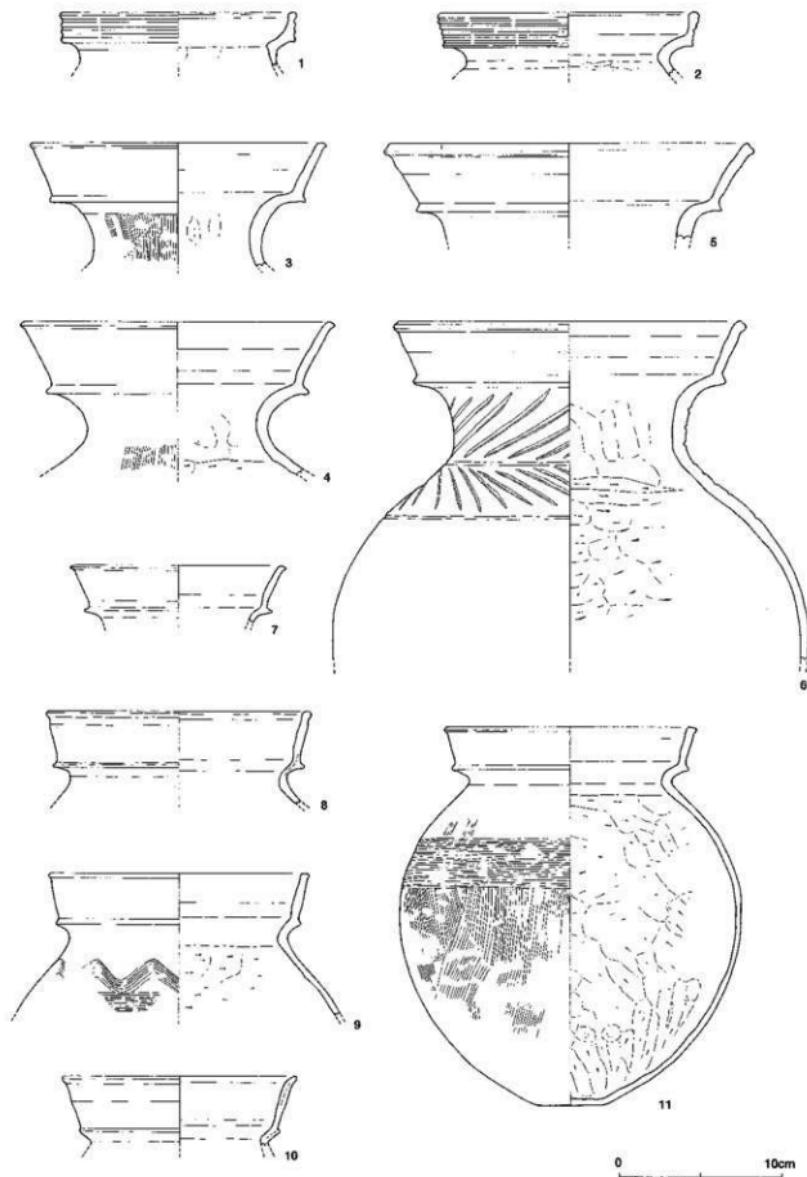
#### SD24（第3図）

調査区の南東端F2、3グリッドで検出した溝で、幅1m弱・深さ約40cmを測る。断面は逆台形を呈し（第27図）、SD21、22と形態は類似しているが、北西から南東へ走っており（N-57°-Wを指向する）、方向が異なる。本調査区において同方向の溝はSD08、09があるが、距離がかなり離れているため、同一・同時期の溝と考えるのは難しい。時期を決定する遺物は出土しておらず、検出規模もわずかなため、遺構の性格も不明である。

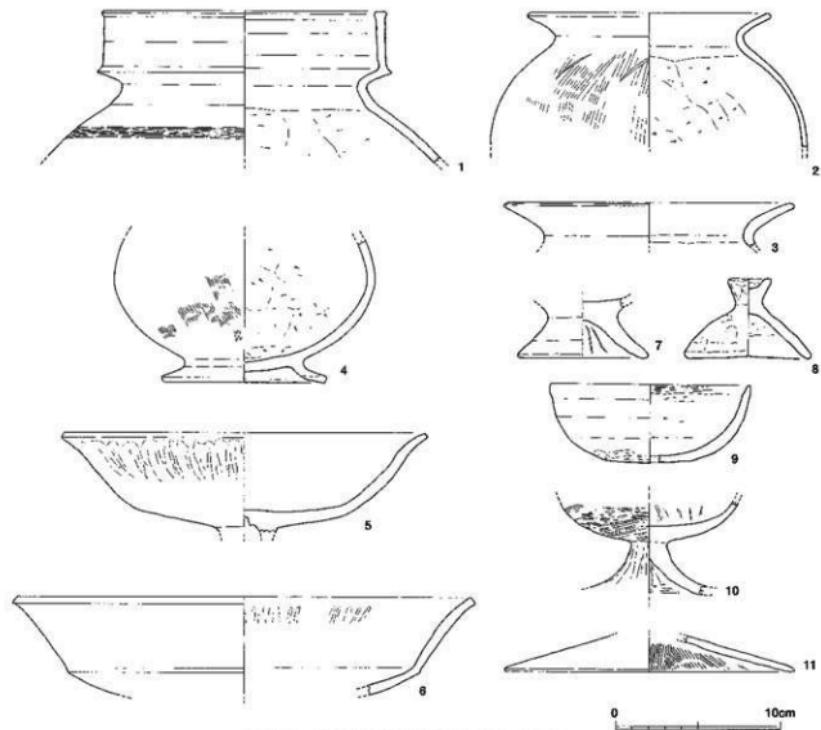
#### 遺構外出土遺物（第32.33図）

32-1～13は須恵器である。1、2は蓋で、1は輪状の摘みが付く。2は返りがやや深いもので、1と同様輪状の摘みが付くものと思われる。3～5は坏で、3、4は内湾する体部に口縁端部がやや外へ屈曲する。5、6は底部外周に高台が付き、体部は直線的に立ち上がる。7は壺と思われる底部で、外面には回転ヘラ削りが施される。8～11は皿で、8、9、11の底部は回転糸切り後ナデ調整、10は回転糸切り痕が残る。11には高台が付く。12.13は高坏の脚部である。これらの須恵器のうち1～3は奈良時代に想定され、他は概ね8～9世紀代の所産と考えられる。

32-14～21は土師器である。14～17は坏で、14は貼り付け高台が付き、15は「ハ」の字に開く高足状の高台が付く。16は皿状に、17は直線的に体部が開く。14.16.17は全体に赤色塗彩される。いずれも、8世紀後半から9世紀前半にかけてのものと考えられる。18.19は土師器の壺で口縁はラッパ状に開くものである。21は土師器の高坏脚部である。20は移動式竈の底部で、内面に荒い削り、外面は刷毛目調整で下部は指圧痕が見られる。23は土製支脚の受部、22は脚部である。22の中央部には径1cm程度の孔が穿たれている。24は播り鉢の口縁部破片である。中世末から近世初頭のものと考え



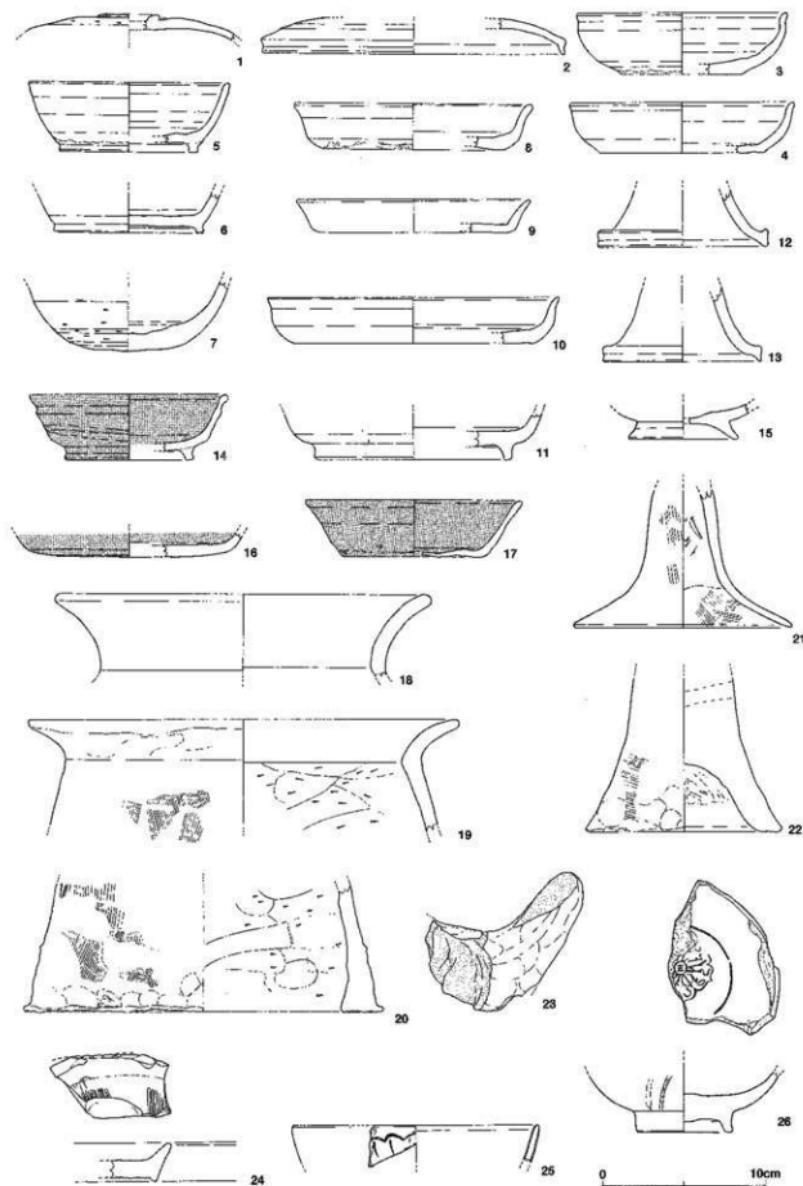
第30図 SD23出土遺物実測図1 (S=1:3)



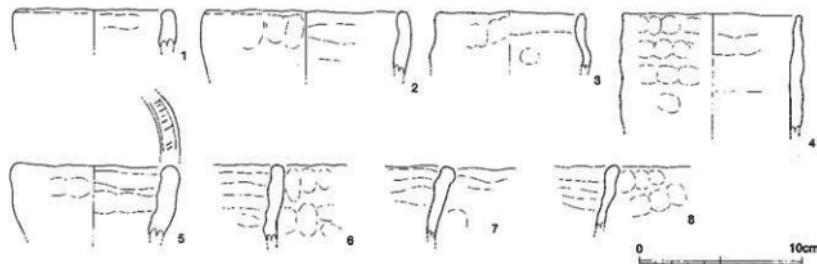
第31図 SD23出土遺物実測図2 (S=1:3)

られる。25は李朝期の青磁碗の口縁部破片で、削りだしの蓮弁文が施される。26は青磁碗の底部で、外面には弱い蓮弁文が施され、見込みに正の字が刻まれている。中国産と推定される。

33—1～8は製塩土器である。口径9～12cmを測る。いずれも外面には指圧痕、内面には強い横なで痕が見られ、浅い橙色を呈す。口縁端部は平坦面を作るもの(1, 2, 5, 7)と、丸く収めるものの(6, 8)、細くなるもの(3, 4)があり、5の上面には刻み目が施される。3, 4以外は器壁が厚い。すべて底部を欠いているが、概ね砲弾状を呈するものと思われる。8世紀から9世紀にかけての六連式の焼塩土器と考えられる。これらは、出雲地方では、稻佐・原山(大社)や上長浜貝塚などで出土している製塩土器とよく似ていることから、近場の海浜部で生産されたものが運ばれてきて使用されたものと考えられる。



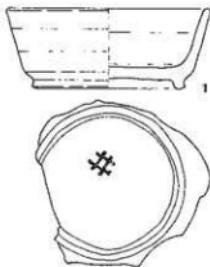
第32図 遺構外出土遺物実測図1 (S=1:3)



第33図 遺構外出土遺物実測図 2 (S=1:3)

**墨書き須恵器（第34図）**

搅乱中であるが、C11グリッドから墨書き須恵器（34—1）が1点出土している。高台付の壺底部で、口径12.4cm、底径9.3cm、器高4.8cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、貼り付け高台が付く高広IVB期（8世紀末～9世紀）に比定される<sup>(18)</sup>。底面は回転糸切り後無調整で、そのほぼ中心部に「井」の字が書かれている。縦横1.5cm角でしっかりとした字体で書かれている。しかし、現状では肉眼で薄く確認できる程度である。約100m南に位置する第1次調査地（平成6年度）の2区A3グリッドからは、同時期の所産と考えられる「井」の字が描かれたヘラ書き須恵器が出土している。井戸等に関連する使用目的のためであろうか。このような土器を持つ集団がこの地に存在していたものと考えられる。



第34図 墨書き須恵器実測図 (S=1:3)

## 第4章　まとめ

今回の調査地である小山遺跡第3地点では、これまで第1次調査（平成6年度）と第2次調査（平成9年度）が行われている。第1次調査では、奈良・平安時代の溝・土坑・ピット等が多数検出されている。また、8世紀から9世紀にかけての墨書き土師器やヘラ書き須恵器が出土しており、「出雲國風土記」記載の「神門郡八野郷庁」の位置関係を探る手がかりとなるものである。今回の調査で出土した墨書き土師器（34-1）には、第1次調査2区検出のヘラ書き須恵器と同じ「井」の字が書かれている。また、製塙土器も第1・2次調査同様検出した。ほぼ同時期の遺物と考えられることから、当該期に遺跡は全域に発展していたものと考えられる。しかし、これらの土器はいずれも包含層や擾乱からの出土であり、「郷庁」に比定できる遺構は検出されていない。墨書き土師器やヘラ書き須恵器だけでは、一概に官衙と関連づけられないため、集落の範囲内でとらえるべきものと考えられる。

溝状遺構のうち南北方向に走る溝6条が、奈良・平安時代の溝と考えられる。これらの溝はSD03とSD04・20（SD20をSD04の延長と考える）、SD08とSD09、SD12とSD13というように、2条平行する形態をとっている。2条同時に存在していたものか、前後して掘られたものかは不明であるが、遺構面のコンタはこれらの溝の方向に合っており、当時の地形に沿って掘られた灌溉用の溝と思われる。8世紀から9世紀の遺構としては他に、SK10とSK19がある。

東西方向に走る溝は、遺構の切り合いなどから、上述の溝より後～中世末までのものと考えられる。SD01とSD02、SD21とSD22がそれで、3～4mの間隔で平行している。また、SD11、SD18、19も同方向になり、SD11やSD18、19については擾乱や調査区外に平行する溝がある可能性も考えられる。SD22とSD02の間は約13m、SD01とSD11は約23m、SD11とSD18は約36mそれぞれ距離をもって掘られている。SD18の南には同時期のSA01とSB01があり、これらの溝は区画性を持って作られたことが考えられる。SD01より南側で検出した中世末の井戸や土坑は南北方向に並んでおり、ここに地下水の筋があったことが分かる。

SK01からは骨材を採取した牛馬の骨が出土しており、近くに骨材生産の工人の存在が窺える。

調査区の南側で中型甕を出土するSK18は、古墳時代後期の遺構としては本調査区で唯一のものである。第1・2次調査区でも、古墳時代前期後半から後期にかけての遺構・遺物はほとんど検出されておらず、遺跡全域にわたって空白期間であったと考えられる。

SK18の西で検出したSD23は「環濠」的様相を呈す大溝である。SD23は弥生時代中期後葉から後期前葉にかけて掘削され、古墳時代前期前葉に埋没するが、これは天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡など、出雲平野の遺跡で検出される「環濠」の状況に類似する。この溝の埋まつた古墳時代前期前葉から後、SK18の掘られるまで、本遺跡においては衰退期であったと考えられる。

本調査区からは松本Ⅲ-1様式の土器片が1点（20-2）出土しており、遺跡の出現は弥生時代中期中葉までさかのぼるものと考えられる。本調査区より約0.5km北西には、弥生時代中期から後期において、出雲平野北部地域の撫点的集落としての役割を持つ矢野遺跡が位置しており、本遺跡はその衛星的な遺跡として派生、発展したものと考えられる。

## 参考文献一覧

- 山本 清 「出雲市大塚町土器散布地」『島根考古学』第2号 1948
- 田中義昭 「出雲市小山遺跡第1地点の調査」「古代金銅生産の地域的特性に関する研究」 1992
- 田中義昭他 「出雲市矢野遺跡の発掘調査」『昭和63年度科学研究費補助金（一般研究A）研究成果報告書』 1989
- 近藤義郎編 「日本土器製塙研究」 1994
- 内田律雄 「製塙土器について」「芝原遺跡」松江市教育委員会 1989
- 久保和士・松井 章「角・骨・皮に関する生産」「図解・日本の中世遺跡」小野正敏編 2001
- 鳥根県教育委員会 「古志本郷遺跡I」「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI」 1999
- 鳥根県教育委員会 「古志本郷遺跡II」「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VII」 2001
- 四絆郷土誌編集委員会 「四絆郷上史」 1986
- 出雲高校社会部 「発掘レポ」「菜苑」7号 1968
- 出雲市教育委員会 「遺跡が語る古代の出雲」 1997
- 出雲市教育委員会 「市道渡続平野線道路改良工事に伴う小山遺跡第2地点発掘調査報告書」 1998
- 出雲市教育委員会 「上長浜貝塚」 1996

## 註

- (1) 出雲考古学研究会 「古代の出雲を考える5 出雲平野の集落遺跡II」 1986
- (2) 出雲市教育委員会 「島根県立護短大教職員宿舎建設に伴う小山遺跡発掘調査報告書」 1999
- (3) 出雲市教育委員会 「小山遺跡」「出雲市埋蔵文化財調査報告書 第6集」 1996
- (4) 鳥根県教育委員会 「蔵小路西遺跡」「一般国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2」 1999
- (5) 松井 章氏のご教示による。
- (6) 松本岩雄「出雲・隱岐地域」「弥生土器の様式と編年」木耳社 1992による。
- (7) 弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての編年は、鹿島町教育委員会「南講武草田遺跡」「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5」1992と、中川 寧「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」「島根考古学会」第13集 1996を参考とした。
- (8) 古墳時代前期前葉の編年は、松山智弘「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」「島根古学会誌」第17集 2000による。
- (9) 壺・甕の口縁形態と底部の調整については、上述（8）の文献を参考とし、その位置づけについては松山智弘氏よりご教示頂いた。
- (10) 次山 淳「初期布留式土器群の西方展開—中四国地方の事例から—」「古代」第103号1997による
- (11) 池田満雄「四絆小学校付近出土土器」「出雲市の文化財」第1集1956
- (12) 施島町教育委員会「南講武草田遺跡」1992F-3区出土51-350
- (13) 出雲市教育委員会「天神遺跡第7次発掘調査報告書」1997S D 0 6 出土61-63
- (14) 出雲市教育委員会「四絆幼稚園改築事業に伴う小山遺跡第3地点発掘調査報告書（第4次発掘調査）」 2002
- (15) 鳥根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書—和田園地造成工事に伴う発掘調査—」 1984による。

出土遺物観察表(土器)

件番 番号	回版	出土地点	種別	器種	法蓋(単位: cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	高さ				
8-1	20	SD02-P4	土師器	製造土器 (破片)				内外面に剥離痕あり	にぶい黄褐色	精製土	
8-2	20	SD02-P3	須恵器	环(底部)		7.1		回転糸切り	灰褐色		
11-1	20	SE01	土師器	甕	16.2			肩部外側はヨコ削毛目 内面はヨコ削り	灰黄色	陶砂粒含む (石英・長石)	瓶底下内面に指圧痕
11-2	20	SE01	土師器	底脚环	19.5	11.2	8.1	外面はナデ	浅い黄褐色	陶砂粒多く含む	
11-3	20	SE01	上師器	环	14.2	6.3	3.4	ロクロ回転成形、回転糸切り	黄褐色	精製土	丸形
11-4	20	SE01	上師器	环(底部)		5.6		回転糸切り、見込みに渦巻き状のナデ	灰褐色	精製土	外側一部にスス
11-5	20	SE01	土師器	环(底部)		6.1		回転糸切り	内／にぶい黄褐色 外／にぶい黄褐色	陶砂粒若干含む	
13-1	21	SK10	青磁器	碗	13.3			織籠きの連弁文	灰オリーブ色	密	
17-1	22	SK10	須恵器	蓋	15.6		2.8	天井部は回転削り、輪状模様	灰色	密、1mm以下の砂粒を少し含む	
17-2	22	SK10	須恵器	蓋	14.8		1.4	天井部は削り後ナデ	灰白色	密	
17-3	22	SK10	須恵器	环(底部)		8.0		高台付、回転糸切り	青灰色	密、1mm以下の砂粒を少し含む	
17-4	22	SK10	土師器	环(破片)				ナデ	明赤褐色	密	赤色塗彩
17-5	22	SK10	上師器	环(破片)				ナデ	明赤褐色	密	赤色塗彩
17-6	22	SK10	土師器	环(底部破片)				高台付	明赤褐色	密	赤色塗彩
20-1	23	SK10	須恵器	甕	21.6		55.2	外面は平行タキタ、内面は円形当て底、横下半に力キメ	灰色	密、白色粘土質 半含む	ほぼ丸形
20-2	23	SK10	須恵器	蓋	15.4			内面は刷毛目、頭部に成型時の指圧痕	黄灰色	陶砂粒少しある (石英・長石)	松本遺一前期
20-3	23	SK10	須恵器	蓋	15.8			外面に1条の沈線	灰色	密	
21-1	23	SK10	土師器	环	11.8	7.3	3.5	ロクロ成形、回転糸切り後ナデ	褐色	精製土 (石英若干含む)	ほぼ丸形
23-1	27	SD04	弥生土器	蓋(山形破片)				2条の凹線	黒色	陶砂粒含む	
23-2	27	SD04	須恵器	环(口縁部)	11.9			ナデ	暗灰褐色	密	
23-3	27	SD09	土師器	环	12.6	9.0	3.6	内外面にはナデ、底面は削り後ナデ	暗色	精製土	丸形 赤色塗彩
23-4	27	SD12	須恵器	环	13.4			ナデ	灰色	密、1mm以下の砂粒を含む	
23-5	27	SD12	須恵器	盖(破片)				平坦な口縁で、小さな溝が付く	灰色	密	
23-6	27	SD12	土師器	环(底部)		5.9		回転糸切り	淡黄色	陶砂粒含む	
23-7	27	SD12	土師器	甕	15.4			ナデ、底部以下削り	にぶい黄褐色	陶砂粒含む	
23-8	27	SD13	須恵器	环	13.9			ナデ	灰色	密	
23-9	27	SD14	須恵器	高环				二角の2方窪かし	灰色	密	
23-10	24	SD23	弥生土器	甕	14.4			口縁に貝殻表面による3条の横凹線、内面削痕以下削り	内／須恵色 外／黄褐色	陶砂粒含む (石英・長石・雲母)	
23-11	24	SD23	弥生土器	甕	15.4			口縁に貝殻表面による5条の横凹線、内面削痕以下削り	内／青褐色 外／灰褐色	陶砂粒含む (石英・長石・雲母)	
23-12	24	SD23	上師器	蓋	13.0			頸部外面タケ刷毛目、内面にナデづけの捺压痕	灰褐色	陶砂粒少ない 編製された土	
23-13	24	SD23	上師器	甕	19.0			頸部外面タケ刷毛目、内面にナデづけの捺压痕	灰褐色	陶砂粒少しある (石英・長石・雲母)	

井戸番 番号	回数	出土地点	種別	器種	寸法(単位: cm)			形態・調整の特徴	色調	施七	備考
					口径	底径	厚さ				
30-5	24	SD23	土師器	甕	12.0			口縁端部を下方に引き出す	灰褐色	微砂粒多く含む (石英・長石・雲母)	
30-6	25	SD23	土師器	甕	21.0			口縁端部を下方に引き出す。周囲外表面に有輪男文状、下段には折継、腹部内面にナコづけの捺压痕	灰褐色	微砂粒多く含む (石英・長石・雲母)	
30-7	24	SD23	土師器	甕	13.0			ヨコナデ	淡い黄褐色	微砂粒少ないと見受けられた土	
30-8	24	SD23	土師器	甕	16.2			口縁端部を外側に把圧	内/浅黄褐色 外/灰白色	微砂粒含む	
30-9	24	SD23	土師器	甕	18.0			肩部に刷毛底による1cm幅の波状文、内面は不明瞭なヨコ引り	灰褐色	微砂粒多く含む (石英・長石・雲母)	外面一部にスス付 布留壓系
30-10	24	SD23	須恵器	甕	14.4			口縁端部は傾く外反。小さく突出する後、やや湯い器壁	にぶい黄褐色	微砂粒多く含む	
30-11	15	SD23	土師器	甕	15.2	4.0	23.4	口縁端部に半切削、外觀質部はヨコ刷毛口、肩下半ト子刷毛目、内面側下部に指捺痕ナコづけ放	内/灰褐色 外/黒色、灰褐色	微砂粒多く含む (石英・長石・雲母)	外全面にスス付 布留壓系
31-1	24	SD23	土師器	甕	16.0			口縁端部に半切削、豆添外腹に幅1cmのヨコ刷毛目、ヨコなで	灰褐色	微砂粒多く含む (石英・長石・雲母)	
31-2	24	SD23	土師器	甕(單純口縫)	14.4			外側タテ刷毛目。肩部にヘラ括きの直線文	内/黄褐色 外/灰黄色	微砂粒多く含む	外全面にスス付 布留壓系
31-3	24	SD23	土師器	甕(單純口縫)	17.2			「く」の字状に大きく外反	明黄褐色	微砂粒多く含む	外一面にスス付 布留壓系
31-4	26	SD23	土師器	台付甕?		10.0		外腹は彎いタテ刷毛目刷毛、内腹は所取り後一辺ナコづけ	黄褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	台付
31-5	26	SD23	土師器	高环 (环部)	22.0			外腹にタテ方向のヘラマガキ接合部は半突起、a	灰褐色	微砂粒多く含む (石英・長石・雲母)	
31-6	26	SD23	土師器	高环 (环部)	27.6			やや小さな波を持つ。内腹にタテ方向のハマミガキ、外腹はヨコなで	内/灰褐色 外/黄褐色	微砂粒多く含む (石英・長石・雲母)	内面一部にスス付 布留壓系
31-7	24	SD23	土師器	低脚 (脚部)		7.6		内面横間に1本、タテ方向に2本のヘラ括き沈線	浅黄色	微砂粒少ないと見受けられた土	ヘラ括き沈線は 記号か
31-8	26	SD23	土師器	甕	7.4	4.8		外全面に捺压痕、内腹中央部は削り、外腹はヨコなで	灰褐色	微砂粒少ないと 見受けられた土	手づくね状
31-9	26	SD23	土師器	环	12.0	4.8		底部はヘラ削り削りナダ。内外腹ヨコなで	内/灰褐色 外/黄褐色	微砂粒多く含む (石英)	
31-10	SD23	土師器	高环					外部外面はヨコカ向、環部内腹と脚部外腹はタテ方向の彎いミガキ	内/浅黄褐色 外/灰白色	微砂粒多く含む (石英・長石・雲母)	内面透かし
31-11	24	SD23	土師器	高环 (脚部)		17.5		軽く傾く、内腹は削り刷毛目	内/微黄色 外/浅黄褐色	微砂粒少ないと 見受けられた土	
32-1	28	遺構外 F16Gr	須恵器	甕				回転ナデ、天井部は削り	灰色	密	輪状捲み
32-2	28	遺構外 T16Gr	須恵器	甕				回転ナデ	黄褐色	密	
32-3	28	遺構外 C16Gr	須恵器	环	13.0	7.2	3.7	回転糸切り後ナデ	灰褐色	密	
32-4	28	遺構外 C16Gr	須恵器	瓶	13.5	10.0	3.1	回転糸切り	灰色	微砂粒少ないと 見受けられた土	
32-5	28	遺構外 D14Gr	須恵器	环	12.3	8.4	4.3	回転ナデ	灰色	密	點付高台付
32-6	28	遺構外 D14Gr	須恵器	环(底部)		9.1		回転糸切り、見込み内ヨコナデ	灰色	密	高台付
32-7	28	遺構外 E16Gr	須恵器	甕				回転削り 底面は削り後ナデ	灰色	密	底面にスス付 布留壓系
32-8	28	遺構外 E16Gr	須恵器	甕	14.0	11.0	2.8	回転糸切り後ナデ	灰色	密	
32-9	28	遺構外 E14Gr	須恵器	甕	14.1	11.5	2.0	回転ナデ	灰白色	密	
32-10	28	遺構外 D15Gr	須恵器	甕	18.0	14.6	2.8	回転糸切り、ナデ	にぶい黄褐色	微砂粒多く含む	燒成不良
32-11	28	遺構外 F16.17Gr	須恵器	环(底部)	11.8			回転糸切り後ナデ	灰色	密	高台付
32-12	28	遺構外 F16.17Gr	須恵器	高环 (脚部)		10.3		回転ナデ	灰色	密	

沖田 番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(単位:cm)			形態・測量の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	高さ				
32-13	28	遺構外 C15Gr	須恵器	高杯 (脚部)		9.6		回転ナデ	灰色	密	
32-14	28	遺構外 12Gr	土師器	杯	12.0	7.8	4.0	回転ナデ	明赤褐色	密	點付高台付 赤色塗彩
32-15	28	遺構外 C.15Gr	土師器	坪 (底部)		5.1		回転ナデ	褐色	微砂粒少し含む	高台付
32-16	28	遺構外 C.15Gr	土師器	壺		12.8		回転ナデ、内面に施りの刷毛目痕	内／明赤褐色 外／赤褐色	密	赤色塗彩
32-17	28	遺構外 C.15Gr	土師器	杯	13.2	8.6	3.5	角切り後ナデ、	褐色	密	赤色塗彩
32-18	28	遺構外 C7Gr	土師器	甕 (口縁部)	23.1			ナデ	内／浅黄褐色 外／オリーブ黒色	微砂粒多く含む	
32-19	28	遺構外 C7Gr	土師器	甕	22.0			甕部以下外表面はクテの刷毛目、内面はヨコ方向の削り	内／浅黄褐色 外／にぶい黄褐色	微砂粒多く含む	
32-20	28	遺構外 D.15Gr	土師器	甕 (底部)		21.8		外表面はクテ刷毛目、内面はヨコ削り、底部に接ぎなつけ板	にぶい褐色	微砂粒多く含む	
32-21	28	遺構外 NSGr	土師器	高杯 (脚部)		13.4		外表面はナデ、内面は削りと刷毛目	内／にぶい褐色 外／にぶい黄褐色	微砂粒含む	
32-24	28	遺構外 陶器	陶器	履り鉢 (口縁部)				7条以上草位の握り目	赤褐色	密 微砂粒少し含む	
32-25	28	遺構外 9Gr	青磁器	碗 (口縁部)	15.0			蓮弁文	灰オリーブ色	密	
32-26	28	遺構外 C9Gr	青磁器	碗 (底部)		11.6		蓮弁文 見込みに花文様	灰オリーブ色	密	中国製
33-1	29	遺構外 C15Gr	土師器	製塙土器	9.4			口縁端部丸い、ヨコナデ底 器壁厚い	内／褐色 外／灰黄色	粘土質	
33-2	29	遺構外 14Gr	土師器	製塙土器	11.4			口縁端部に平坦面、ヨコナデ底 器壁厚い	内／浅黄褐色 外／黄褐色	微砂粒含む	
33-3	29	遺構外 C14Gr	土師器	製塙土器	9.2			口縁端部丸い、ヨコナデ底 器壁薄い	にぶい褐色	微砂粒含む	
33-4	29	遺構外 16.17Gr	土師器	製塙土器	11.0			ヨコナデ底、指痕底 器壁薄い	褐色	微砂粒少し含む	
33-5	29	遺構外 C14Gr	土師器	製塙土器	10.4			口縁端部に平坦面を作り、器口を 丸す、強いヨコナデ、器壁厚い	外／にぶい褐色 内／にぶい黄褐色	微砂粒含む 赤褐色	
33-6	29	遺構外 C13Gr	土師器	製塙土器 (口縁破片)				口縁端部に平坦面、ヨコナデ、指 痕底、器壁厚い	褐色	微砂粒含む	
33-7	29	遺構外 P15Gr	土師器	製塙土器 (口縁破片)				口縁端部に平坦面、ヨコナデ、 指痕底、器壁厚い	浅黄褐色	微砂粒含む 赤褐色	
33-8	29	遺構外 C.15Gr	土師器	製塙土器 (口縁破片)				口縁端部は丸い、ヨコナデ、指痕 底	内／浅黄褐色 外／黄褐色	微砂粒含む 赤褐色	
34-1	29	遺構外 須恵器	坪		13.5			回転糸切り、回転ナデ	灰褐色	密	高台付 「井」の墨書き

出土遺物観察表（土製品）

辨別 番号	図版	出土地点	種別	法量（単位：cm, g）					色調	胎土	備考
				長	巾	高	底径	系縄			
32-22	28	遺構外 F16G	土製支脚 (脚部)			9.2			灰黄褐色	微砂粒多い 小砂粒含む	上部に径1cmの穿孔あり
32-23	28	遺構外 F16G	土製支脚 (支脚)						に赤い褐色	微砂粒多い	一筋スス付着

出土遺物観察表（石器）

辨別 番号	図版	出土地点	種別	材質	法量（単位：cm, g）					備考	
					最大長	最大幅	最大厚	外径	孔径		
8-3	10	SB02-P2	石	碧玉岩	9.5	8.5	7.0			1,070	方形に加工、一筋にスス村曾 炉台か？
16-10	22	SD15	石器	黒曜石	2.5	1.6	0.3			4	平形無墨

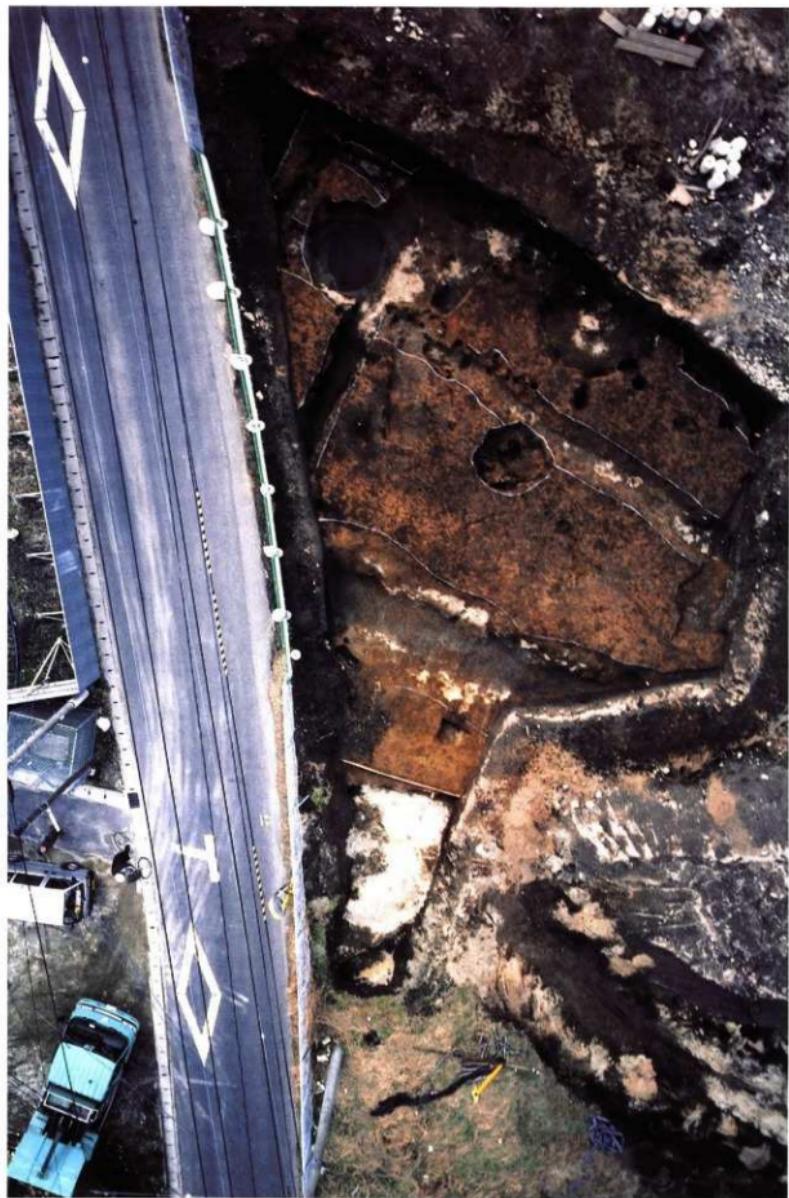
出土遺物観察表（木製品・その他）

辨別 番号	図版	出土地点	種別	遺存状況	法量（単位：cm, g）					備考
					最大長	最大幅	最大厚	重星		
14-1	21	SE01	杭	良好	66.6	7.2				元部に削、焼いて加工
14-2	21	SE01	杭	良好	47.5	7.3				原本を使用
14-3	21	SE01	杭	良好	38.2	5.4				皮を取り除いたもの
14-4		SE01	杭	良好	37.0	4.9	1.9			角材
14-5	21	SE01	物部？	一部欠損	41.0	6.2	4.6			方形の貫穴あり
14-6	21	SE01	ヘラ形	一部欠損	27.1	3.4	0.3			御歎きの底を転用
13-3	21	SE01	骨 (大距骨)	一部欠損	22.5	7.7	4.2			長さ6cm、幅1.6cmの切り取り痕あり 「U」字形の骨材を採取

# 図 版



調査区全景（上から） 合成写真



SE01、SD03、23、SK18（上から）



調査区南半分（上から）



調査区北半分（上から）

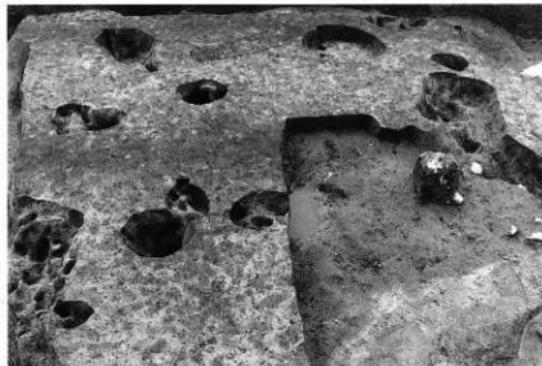
SB01 (北から)



SB02 (東から)



SB02.SD12.13プラン(東から)





SE01遺物出土状況



SE01（南から）



SE01, SD03, 20, 21, 22



SK01



SK01遺物出土状況



SK01、02（南から）



SK10遺物出土状況



SK18遺物出土状況



SK18（北から）





SD04 (南から)



黒色土落ち込み (北から)



図版 12



4Grより北調査状況



SD08、09（南から）



SD18、19 (西から)



SD08、09、11 (西から)



SD12（北から）



SD12土層



SD13土層



SD15検出状況



SD15土層



SD15（東から）



SD23検出状況（南から）



SD23調査状況



SD23遺物出土状況



SD23遺物出土状況